

篇五第書叢右座

蘆川忠雄著

應對談話法

東京 實業之日本社發行

252
529

076681-000-6

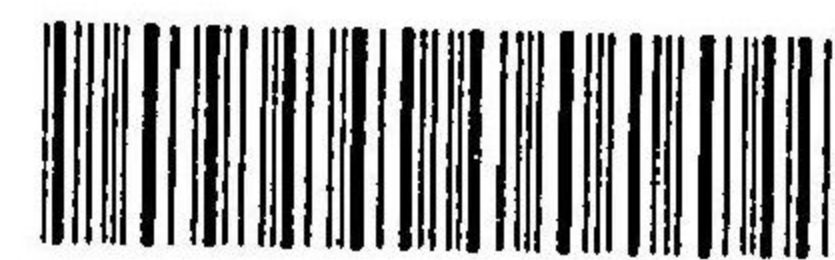
特19-207

應對談話法

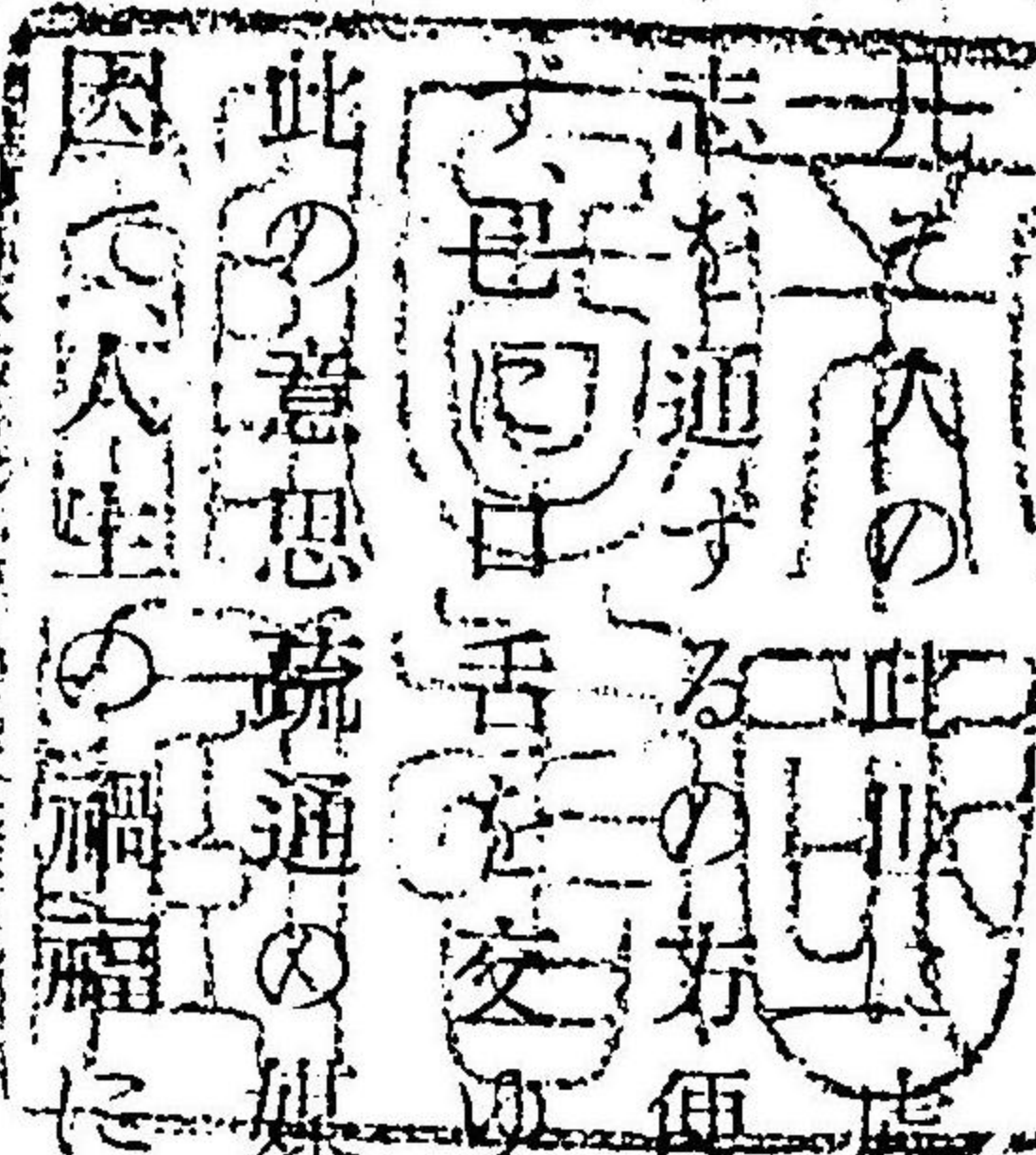
蘆川 忠雄 / 著

M39.9

DAB-0033



應對談話法序



其の内此の世に處して他人に接するや必ず自己の意
 志を達するの方便として互に口舌を交へざるを得
 ず世に口舌を交する以上は必ず談話なきを得ず明
 此の意思疏通の媒介物たる談話は之が應用の如何に
 因て人生の禍福に一大關係を及すものなるに世人は
 之を知るや知らずや思ふ所は漫然口を開て喋々喋々
 し一言一句の使用が自他に對して一大影響を及すに
 至ることを悟るもの尠し。

明治 9 年 3 月 20 日
 39
 内交

應對談話法序

以て平凡普通の事と思ふが故に、之を輕視して利害の一身に關する事の大なるを思はざるものにして、畢竟談話に就て十分の訓練を要すべきを知らざるに出づ、是れ決して用意周到にして巧妙なる處世法を講ずる所以にあらず、要するに談話は必ずしも喃喃として口舌を動かすを以て理想とするものにあらずして、寧ろ品性、思想の外部に表白せらるゝものと見るべきものなれば、決して之を輕々視するが如き事あるべからず、又之が圓滿なる訓練法を怠りて可なるの理あるべからず、往時に於て已に然りとせば、二十世紀の今日に於

ては猶更其然るものならずや
予茲に感あり、青年子弟にして新に活社會に處せんとするものに對し、巧妙適切なる應對談話の活法を説明し、以て斯法に一路の光明を點ずるの意を以て、茲に『應對談話法』の一書を稿したり、其説く所固より卑近にして、大方君子の一覽に値ひせずと雖ども、悉く自家日常の實驗より觀察し來りたるものにして、間々歐米先哲の教訓を參酌して、安排調和を力めたるものあり、夫れ青年子弟にして自己の缺點を指摘して、大に談話の巧妙、圓熟の域に入らんと欲せば、一に斯法の指示する大

眼目を服膺して、自己の力に因りて實踐躬行を期する
にあるのみ。

明治三十九年八月下浣

著者 蘆川生識

應對談話法目次

第一章 談話法研究の目的

- ◎ 秩序的研究の時代……………一
- ◎ 世人は何故に看過するにや……………三
- ◎ 困難の存する所茲にあり……………五
- ◎ 談話法の研究は無益なりや……………七
- ◎ 興味津津々として盡さず……………九
- ◎ 神隨を捉ふるは難からず……………一〇
- ◎ 實踐躬行に俟つのみ……………一二

第二章 談話は品性修養に俟つ……………一四

- ◎ 根本的觀念の謬妄……………一四

- ◎ 談話法は雄辯學にあらず……………一六
- ◎ 畫家の解剖學を要するが如し……………一七
- ◎ 談話は精神的行爲なり……………二〇
- ◎ 饒舌は身を誤るの基……………二二
- ◎ 談話を潤飾するもの……………二三

第三章 巧妙の談話と自信力……………二五

- ◎ 言語遲滞の起る所以……………二五
- ◎ 自己の無作法を廣告する人……………二六
- ◎ 自信力なきの結果……………二七
- ◎ 粉飾を俟つの要なし……………二九
- ◎ 他人に不快を感ぜしむ……………三〇
- ◎ 勇氣にて一心を支配せよ……………三二

第四章 簡潔と敏速……………三四

- ◎ 頓才の神髓如何……………三四
- ◎ 勞して益なきの人……………三六
- ◎ 歐米人の見地如何……………三八
- ◎ 談話上の八大要件……………四〇
- ◎ 作法と言語の關係……………四一

第五章 傾聽的性格を訓練せよ……………四三

- ◎ 人格の高潔を嘉す……………四三
- ◎ 陋劣下賤の行爲……………四六
- ◎ 最良の談話家……………四七
- ◎ 不得要領に終るべし……………四九
- ◎ 不和の基を作るの人……………五〇

◎他人の信任を博する所以……………五二

第六章 謙退辭讓の精神……………五三

◎快活の原動力……………五三

◎自負的口吻を避けよ……………五五

◎日常の生活は演說會にあらず……………五七

◎叩けば鳴る人間……………五九

◎千金の重みある言語……………六〇

第七章 傲慢と議論……………六二

◎談話上の一大禁物……………六二

◎優婉の作法と穩健の態度……………六四

◎議論の必要を認むべきや……………六五

◎議論家は一種の性癖……………六七

◎是れ一種の勝利なり……………六八

◎誹謗の言を慎め……………六九

第八章 快感を興ふは第一……………七二

◎人心の美的光輝……………七二

◎一に氣質の鍛鍊にあり……………七三

◎快活心訓練の六大要件……………七四

◎快活心表示の機會……………八二

第九章 風采と態度……………八四

◎根據なき妄評……………八四

◎名優の舞臺道具……………八五

◎清潔の衣服を着けよ……………八六

◎他人の眼に着き易き者……………八八

○適度を忘れたる愚味漢……………九〇

○先方の顔を見て語れ……………九一

○談話の道具立……………九二

第十章 頓才發揮の必要……………九四

○談話上のダイヤモンド……………九四

○天外の奇想を要せず……………九六

○着眼點の如何に存す……………九八

第十一章 沈黙の眞價を解せよ……………一〇〇

○沈黙も一種の談話術也……………一〇〇

○必要な言は無益のみ……………一〇一

○拙劣の談話家……………一〇二

○沈黙の眞價の存する所……………一〇四

○眼の語る談話……………一〇五

○巧妙の談話家は沈黙家なり……………一〇七

第十二章 愛嬌表示の秘訣

○心地よき言語とは何ぞや……………一〇九

○愛嬌と阿諛とを混同する勿れ……………一一〇

○自己眞情の流露のみ……………一一一

○愛嬌の途は自得にあり……………一一二

○他人の缺點を發くべからず……………一一四

第十三章 初對面の人に接する道……………一一六

○万事初對面にて決せらる……………一一六

○試験中の身たるを悟れ……………一二七

○初對面の七大要件……………一二九

應對談話法目次終

應對談話法

蘆川忠雄著

第一章 談話法研究の目的

秩序的研究所の時代

近時人文の發達に伴ひ、人々相互間の交際も日に益々頻繁に赴くは言ふ迄もなく、又其交際の範圍が次第に擴張せられて、知己たり友人たるべきものを多からしむるは、真に自然の勢のみ、今後に於て諸般の制度にして層一層の進歩を來さんには、其交際應待の範圍も亦更に倍蓰す

るに至るべきは、何人も疑を容るゝの餘地なき也。

凡そ文物制度の進歩と發展に連れて、萬事總て科學的と改まり秩序的と化するに至るは、大勢の赴く所にして拒むべくもあらず、否、是非とも學理的科學的研究に入るべきは、明白の理にあらずや、鐵道、電氣、電線の如き文明的機器の發明あるや、之と共に此等の事項に關して詳密の知識を得んがために、之を學理的に研究するに至れるが如き、亦以て其一般を窺ふに足るべし。

獨り鐵道、電氣の如き工業に關する知識のみならず、各人の經營如何に因て成敗を決すべき商業の如きものすら、之を科學的に研究して、得る所決して妙きのみならず、之に因て詳密、細緻の知識を増進し、以て斯業に對する應用の力を發揮せしむるもの多々あるにあらずや、吾人が日常世に處して、最も必要を感ずる應對談話の如きは、隨機應變

の處置に待つもの多く、到底之をして規矩整然たる條理の下に研究すること能はざるが如きも、然かも亦た此秩序的の研究に因て得る所は、決して無効に終らざるべし、已に商業に従事するものにして、商業學の知識を必要となし、工業に従事するものに於て、斯業に關する詳細の知識を學理的に研究するの必要を認めたる以上は、何故に應對談話の法則を科學的に研究するを看過するにや、

世人は何故に看過するにや

吾人は恐る、今日の如く萬般の事項に對して、一々學理的秩序的の研究を積むこと日を逐ふて益々盛んとなるにも關はず、應待談話て尤も重大の問題に對しては、之を苟且に附するにあらざるなきやと、是れ吾人が微力を顧みずして、聊か之が解決を試み、以て圓滿快活なる處世法

の一端に資せんと欲する所以也。

凡そ人あれば必ず談話あり、談話あれば必ず應待の之に伴ふ、孤行孤立にして遁世的生活法を送る程の極端なものにあらざる限りは、小兒と青年と大人の別なく、必ず言語あり又應待の道なかるべからざるものにして、此の一事に冷淡なるものは、人にして人にあらず、如何なる時も、又何れの場所に臨むも、生命の續かん限りは、人として必ず應待談話の必要を感じ、而かも圓滿に之を處理せんとするの念は、各人に共通する至情なるべし。

斯く迄も日々其必要を感じ、又現に此の法則に違背したるものは、社會に立ちて意外の失敗をなす程に重大なるにも關はらず、應待談話の法則を學理的に説明して、人生に一大光明を點するものなきは、實に聖代の一大缺陷たるのみならず、實に人類一般の耻辱にあらずや、吾人は是

非とも之が圓滿周匝なる解決を下して萬一を稗補するの益々切實なるを悟る也、何れにしても、日常に於て尤も必要を感じべき應待談話の要訣を闡啓して、各人の缺點と誤解を矯正するは、決して無益の業にあらざるべきを確信して疑はず。

困難の存する所茲にあり

然れども日常の應待談話てふ問題を捉へて、之を一々解剖説明して科學的學理的に研究するに就ては、尠なからぬ困難を感じるを見るなり、蓋し何人も熟知せる如く、日常の談話應待の如きものは、主として人の頓智機敏、判断力の如何等に因て左右せらるべきものにして、到底一定の法則中に拘束せしめ能はざるものあり、今一例を擧げて之を言はん、に理論上よりすれば、何人にも満足に快感を與へて、先方の人をして自

己の言ふ所を傾聴せしめ、又之と同時に自己も又之に對して圓滿鄭重の態度に出でざるべからざるものなりといへども、各人の性質と時機の場合の如何に因ては、此の法則にて判斷し難きものあり斯かる場合には、應對談話の法則は、殆んど其根底より打破せられて、毫も見ざるべきものなきが如し、

然れども之れのために、談話と應對法の研究を無効視せしむるに足るべきか、少くとも應對と談話の二者は、到底理論的研究を容され難きものにして、單に幾多の失敗を嘗めて經驗を重ねたる上にあらざれば、到底之を修養するの不能なるべきか、一言以て之を掩へば、應對談話の如きものは、他の學理と同じく、書籍的研究の範圍に入るべきものにあらずるか、將た又應對談話の法則は、之を秩序的に研究するに於ては、其趣味の一半を減却して、目的なきに至らしむべきか、此の點に於ても十分吾

人の討究を怠るべからざるものありて存す、

談話法の研究は無益なりや

論者或は曰はん、如何程論理學の修養を積みたりとするも、何等の天才なく、又何等の機敏なる觀察力なきものは、到底偉大なる雄辯家たるを得ず、又何程深く修辭學を研究したりとするも、天稟の才幹を備ふるものにあらざる限りは、到底巧妙なる文章家となることを得ず、畢竟此輩が論理學を學び、修辭學を攻究するが如きは、何等の効果を奏すること能はずして、失敗に終るを免れざるべし、應對談話の研究の如きも、亦之と趣を一にし、之を學理的に研究し、之を實際に適應せしめんと欲するが如きは、畢竟迂遠の業に屬せざるを得ざるべし、故に此の如きものは、一に是れ人の性質と多年の經驗に依りて修養せらるべきものにして、

之を秩序的理論的に研究せんと欲するの類は、識者の所爲にあらず、斯かる無用迂濶の閑事業は、之を閑人に一任するに如かずと、ア、是れ果して正鵠の見解といふべきものなるか、

凡そ處世に困難を感じ、又人と談話し、應待するの道の容易ならざるは、時と場合に應じて機智を用ひ、自己の明晰なる判断力に訴へて、機宜に適するやうの處置を取らざるべからざるの點にあり、且つや人情の紛糾錯雜にして、人各々その性質を異にするや一方の人に應用して成功を奏したる法則も、之を他方の人に適應するに於ては、意外にも失敗を來すことなきにあらず、斯かる場合には、確かに臨機應變の頓才に訴へ、機宜に協ふべき方法を講ぜざるべからず、是を以て反覆常なき人情の間に處して、巧みに自己の手腕を發揮するは、決して談笑の如くに容易なるものにあらず、是れ吾人の十分に知悉する所にして、斯かる一大障

害の之にあるものあるに因り、往々此の應待談話の研究をして失望に至らしむるものなきにあらざるは、事實として拒む能はず、

興味津々として盡きず

然れども此の事實あるがため、若くば斯かる困難の前途に横はるがために、談話の法則を研究するの必要を無視せしむるに至るべき十分の理由をなすに足るべきものありや、吾人を以て之を見れば、斯の如く此の研究の範圍の複雑にして、且つは前途に困難の横はること大なるがため、愈々以て之が研究に必要あるを認めしめ、且つは其興味の津々として常に盡さざるを覺えしむべき一大源泉となすに足るを知る也、若しも應用判断機智に訴ふるを主とするがために、學理的研究をなすべき必要なしといはば、凡百の學藝科學一として、應用機智に訴ふを主

とせざるもの果して幾何かある、若しまた斯の如くんば工業の如き、商業の如き、財政の如き孰れが克く學理的研究の範圍たるべきものならんや、是れ吾人の説明を要せずして明白なるものなるべし、試に實際に就て之を見よ、近代の文明をして其一大特色を發揮せしめたる所以の基は、一に是れ此等の事項に對して科學的秩序的研究所を重ねたるの結果に外ならず、果して然らば此等諸科の科學的研究を必要とするが如く、談話、應待の法に於ても之を履習して最大の効果を奏するに至るべきや蓋し疑を容れず、

神髓を捉ふるは難からず

固より應待談話の法則の如きは、到底規則一點張りにて律すべからざるものあるや言を俟たず之をして圓滿快活なる域に達せしめんと欲

するに於ては、機敏の才能と明晰の判斷力を適應し事情の宜きに從て之を處決せざるべからず、然れども其根本的原理を捉へ、其神髓を傳へて、其精神の存する所を悟らしめ、其他の細目に亘りては、各人の操縦に一任するも、猶且つ妙からぬ利益を興ふるに至るべし、

往昔談話と應待の道に於て尤も拙劣なる某國王あり、使臣に會見して失態を演ずることのみ多かりしかば、彼は幾多の苦辛を凝らしたる結果として、應待と談話の法則を書きたる諸家の名著を取りて再三反覆して之を躬行實踐したるが爲めに、彼が其交際の道に於ても又談話に於ても尤も完璧の域に入り、滿堂の使臣をし其才能の發達に喫驚せしめたりといふ、又嘗て其紳士あり、自己が談話の才能と應待の技倆に於て缺如する所多きものあるを嘆じ、是非とも其才能を發揮せんとの念強かりしが、偶然にも友人の忠告に従ひて、談話と應待の法を書きたる

幾多の書冊を涉獵して之を實踐したるの結果は、當代無比の座談家として交際の紳士として其光彩ある才腕を發揮するに至りしといふ此の如きは固より一二の實例に外ならずといへども亦た以て談話法研究の影響する所の如何程迄に大なるかの一般を窺ふに足るべし。

實踐躬行に俟つのみ

又一方より見れば其適應頓才の發揮の如きは、一に各人の天稟の資性に因て決せらるべき者にして到底書籍的研究を以て千狀萬態にして變幻極りなき幾多の場合に處するの活策を教へ難く又之を教へんとするも到底之を逐一筆にするの煩に隨へざる者あるや明なりと雖も苟くも斯法の明示せる法則に準據して日常躬行實踐する所あらんには假令伶俐機敏にして萬人を凌駕する程の者に非ずとするも苟くも

常識を備へたらん限りは次第に其要點を捉へ其機宜に通じ當意即妙の機智を發揮して十分善く頓才機智判斷の適應を誤るとなきに至らしむること必ずしも以て困難なりといふべからず、

然るに若しも始よりして談話應待の法則の如きは、一に天稟の資性たる特殊の才幹に俟つものなれば之れが研究は無益なりと妄斷して度外視することあらんには幾多の歲月を経過するにも自己の缺點を矯正するに由なく又自己の特點をして愈々光彩を放たしむるとは猶更不可能となるに至るべし是に於てか失敗のみ多くして處世に要する圓滑巧妙の態度は到底涵養するに由なきに至らん是れ豈に各人の本意ならんや又實に幸福に達すべき要素にあらざるをや

之を要するに應待談話の法則は之を研究して妙味の存するのみならず又之が研究の結果善く各自の缺點を矯正して完璧に近からしむる

に至るものなれば、何れの點よりするも、青年有爲の人々が、潛心工夫を要すべき重大の問題たるに値ひず、之を閑却し之を苟且に附するが如きは、用意の周匝緻密なる人といふべからず、處世の術と應待談話の法則とは、常に相關聯し須臾も離るべからざるものたるを忘るゝことなくんば、庶幾くは以て太過なかるべきか、

第二章 談話は品性修養に俟つ

根本的觀念の謬妄

巧妙にして圓満快活なる談話術を修養し、應待の道に於て遺憾なからんとは、何人も期望する所なるべしといへども、單に外形に現はれたる

愛嬌の表示と、口舌の喃々たるのみを以て、其理想となし、これにて完璧の域に入りたるもの、い如く解するは、根底に於て語れるものなれば、吾人は談話法を研究するに先ち、劈頭第一に之が謬想たるを辨明して、着實正鵠の觀念を得せしむるの必要あるなり、

漫然口舌を弄して喋々喃々するは、田夫野人といへども、猶且つ之を善くす、否々、田夫野人こそ其特徴たるものとして見ざるべからず、然るに田夫野人なるものは、果して善く談話の道に於て巧妙快活の域に入りたるものとして認むべきものなるや、彼等は或は喧囂して犬馬の如き音聲を發するかと思へば、或る時は怒號して獅子の吠ゆるが如き觀を呈す、其陋劣にして下賤なる、識者をして窺に苦笑を禁ずること能はざらしむるにあらずや、

談話法は雄辯學にあらず

又多少の教育あり文字を解するものに於ても眞個談話法の何たるを研究せざるものに於ては自己の思ふ所は遠慮もなし吐露し傍若無人の體にて呶々の言を洩らして得々たる者あり或は口に任せて喋々嘯し規則もなく秩序もなく漫然として自己の思ふ所を述ぶるものあり此の如きは果して善く巧妙の談話といふを得べきか修養宜きに協ひ圓滿快活の人として毫も遺憾なかるべきにやア、何んぞ夫れ然らん應待といひ談話といひ其研究の目的は決して雄辯學の研究にあらず滔々として流暢なる能辯に達するを主とするにあらず又單に外部の虚飾を主として他人と交際應接するが如き客觀的陳腐の事項を攻究せんとするにあらず否々斯の如きは寧ろ一の専門的問題として攻究

に値ひせざるものなり苟くも此の如くして十分なるものとすれば談話といひ應待といひ單に外形に現はれたる虚飾を追ふに汲々たるものにして縦しや完璧の域に入りたるものとするも果して何の取る所あらんや

畫家の解剖學を要するが如し

巧妙なる畫家が人物を描寫して眞に迫り妙に入らんとするには必ずや先づ解剖學生理學の一般的研究を爲すを常とすこのことたるや一見如何にも迂濶の極に類するが如しと雖ども實際に於ては決して迂濶にもあらず問題以外に逸するの研究にもあらずして是れ最も切實にして必要の事項なり蓋し畫家の目的とする所は人物を描寫して眞に迫るべき天來の技倆を發揮するにありといへども人物の要所を描

くべき神髓を悟らんと欲せば是非とも解剖學を通じて人體内部の構造までも親しく研究せざるべからず斯くして始めて身體の構造如何に就て精細に筆を下し以て善く其技倆を十分に發揮し得るに至るべし彼れ平々凡々の徒にありては之を以て迂濶と認め之を以て冗長の行爲とすべきも人物描寫の根本的觀念は確かに茲に存するものなれば苟くも疎心の人にあらざる限りは是非とも此の法に訴ふることを廢すべからず

吾人が應待談話の研究に於ても亦其趣を同ふす應待談話の敏速にして機慧に巧妙にして快活なるは固より望まじき所なりといへども單に之のみに拘泥して其他の要旨を沒却するが如きは全然其目的を誤るものといはざるべからず

品性の上に基礎を築け

言ふ迄もなく應待談話の根底は是非とも品性てふ基礎の上に之を築かざるべからず故に巧妙の應待法と快活なる談話法に通曉して萬人の間に處して其才腕を發揮せんと欲せば必ずや先づ品性てふ有力の原動力を備へざるべからず品性の備はらざる談話家は其辯舌が如何程に巧妙にして又其應接法は如何程に進退度ありとするも必ずや長き時日の中には他人に不快を與ふべき失態を演ずるに至るべきものなり之を譬ふれば不當の利益に因て俄然富豪となりたる人が漫に絹布を重ねて傲然として世人に誇示するが如く人物の内容が外觀と相適應せざるを以て心ある人の眼よりして之を見れば如何にも滑稽の極といふ可し

談話家にして品性てふ潜勢力を缺くあらんか其言語は如何に巧妙にして圓滑なるも、又其應待の道に於ては、痒き處に手の届きたるものありとするも、宛然香氣を失せる薔薇花の如く、優美の一半を喪失せしめ見るものをして厭惡の情に堪へざらしむ。品性は是れ談話の生命にして、又應待の精神たるを知らば、談話家としての成功を欲するものは、品性の修養てふ他の重大なる要件をも没却すべからず。

談話は精神的行爲なり

思ふに談話に光彩を添へしむる所以の道は、必ずしも口舌を喃々するをいふにあらずして、談話をして品性を帯ばしめ、活氣あらしむるにあり、又應待をして一層の特色を發揮せしむるものは、單に座臥禮節の如く外形上の作法にのみ限らるゝものにあらずして、其中自ら冒すべからざる作法に因り言ふべからざる威嚴を呈せしむるものに外ならず、この重大なる事項を忘却して、單に口舌上の喃々に達すれば、談話の道に於て上達したるが如く、解するは根本よりして、一大謬妄の見たるを免れず。

思ふに談話なるものは、決して口舌を喃々するが如き器械的のものにあらずして、寧ろ之よりも尤も意味の深長にして、且つ又尤も有力のものたるを知らざるべからず。蓋し眞個の意義に於ての談話は、決して區々たる言語の使用の如きものにあらずして、寧ろ精神的方面に於ける頭腦の作用として見ざるべからざるものなり。さらば修養なき人の談話は、何程長く話し續くるも、何等の裨益を興へざるのみには、却て他人を惱渙せしむるが關の山にて、時間と頭腦を使用すること多く、徒勞の外に何等の得る所なし。

饒舌は身を誤るの基

英國の某大家常に人に語て曰く「沈黙を守れ、左もなくば沈黙に勝るべき有益のことを語れ」と、又某偉人の言に曰く「饒舌のため失敗したることあれども、沈黙のために失敗したるものあるは、手の未だ嘗て聞かざる所なり」と、是れ談話より來る不良の結果をいふにあらずして、言ふべき十分の材料もなく、又何等の修養もなくして、漫然饒舌喃喃して、自他に迷惑を及すものあるを指摘したるものに外ならず、

此の如く他人に快感を與へ、自己の幸福を増進せしむべき談話をして殆んど一種の妨害物たるものと見做すに至らしむるものは、其原因果して安くもありや、言ふ迄もなく、品性の修養を怠り、談話に光彩を添へて、自他の娛樂を増進せしむべき根底に向て、何等の訓練する所なきの

みならず、寧ろ之を度外視し、之を没却するに至らしめたるものにして、斯かる失態を招くに至るもの決して偶然にあらず、

談話を潤飾するもの

要するに何れの點より見るも、應待談話の二者は相互に離るべからざるの關係あると同時に、之を潤飾して光彩赫々たるに至らしむべきものは、一に是れ人心の奥底に潜める最良最美の品性の光輝が煥發したるものならざるべからず、苟くも青年にして此點に對して十分に注意をなし、品性の修養を以て第一になせば、其談話は言々光輝を放つに至るべく、句々趣味の掬すべきものあらん、應待の道に於ても品性の必須なるは猶更のことなり、言語と應待とは畢竟するに人間の意思が外部に發表されし結果なれば、其根本たるべき品性にして充實する所あら

んには、應待談話の二者は、必ず一大美觀を呈せざるを得ず、故に此の見地よりして言へば、縦しや言語の流暢を欲き、應待優婉に達せざることありとするも、苟くも其の人に於て品性の備はらんには、優に此等の缺陥を補正して餘りあるを見るに足るべし、此等の事實は吾人の日常目撃することにして、言語の不明瞭に應待の圓滿ならざるあり、其人に於て品性の備はるを見れば、何人も容赦して追窮する所なきにあらざるや、單に口舌の喃々と外形の態度の如き外觀のみに着目して、其根本たる品性の一事を度外視すれば、談話の研究をして見るに足るものなきに至らしむ、是れ吾人の常に着眼を怠るべからざる所ならずや、

第三章 巧妙の談話と自信力

言語遲滯の起る所以

談話をして巧妙ならしめ、作法をして其宜きに協はしめ、如何なる場合に臨むとも、毫も臆する所なく又恐るゝ所なくして、進退其度に協ひ、言語をして明快流暢に至らむことは、尤も重大のものなれば、是非とも茲に達するを理想とし、之に向て進むの勇氣を備へざるべからず、若し夫れ之を缺くあらんには、談話の威力を減少せしむるに至らん、如何にせば其言語をして流暢自然ならしめ、其作法宜きに協ひて優婉の域に進み得べきや、曰く是れ自信力に外ならず、自信力は萬事を裁斷して誤らざらしむる一大原動力にして、併かも自信力の中には、必ずや勇氣、決斷、正義の含蓄せらるゝものなりとす、此の要素を缺かば、自信力

は消失して其跡を絶つに至るや言を俟たず、

吾人は談話の際に於て漫然其言語を曖昧に附し若くは要領を得ざることを口にして他人を惱ましめつゝあるもの多きを見る假へば必然言はざるべからざる事項あるにも關はらず之を打ち棄てゝ無用迂濶の餘談に涉り若くは問題以外のことを語りて恬然として顧みざるものあり甚きに至りては何をいふやら其談話の要點を聞き取るに苦むものあり或は心の中には十分に言はんとするにも關はらず言語に於ては躊躇して『今より何を言ふべきか又如何にせば此場合に處して可なりや』など頻りに當惑して措かざるものあり

自己の無作法を廣告する人

此の如き人こそ他人より見ても體裁の悪きのみならず又實に無作法

の甚きものなり極端なる言動を取てし傍若無人の行爲に出で傲然として得たるが如き態度あるは固より好ましからぬのみならず又眞に忌はしきものなりといへども口の中にモジクして言はんと欲して言ふこと能はず然かも言はざるが爲めに何となく不足なる顔色をなし或は失意の色を示すが如きは猶更忌むべきの行爲なりとす、特に主客二人のみの場合ならんには他の傍觀者なきがため此の失態も多少容認し得られざるにあらずといへども苟くも多人數集會の席上に於て此の如き行爲あるは自己の失態と無作法を一座の人々に廣告すると同一のものにして尤も謹まざるべからず、

自信力なきの結果

斯の如き失態を招き衆人稠坐の中に於て恥を洒らすに至るの大原因

は何れにありや、こは是れ心中自信力て、確固不拔の精神の缺如するに出づるのみ、自信力缺乏の原因は、自己の心中に談話すべき一定の見解なく、自己の意見として語るべきものなきにも關はず、強て何かを口にせんと欲するより起る弊害なり。

斯の如き状態に於ては、決して流暢巧妙の言語と態度を以て他人に快感を與ふには到底期待すべくもあらず、宜なり彼等の多くが、事毎に失態を演じて、毫も圓滑快活の態度なきに至るや、是れ談話家としては何人も一應心得置かざるべからざる要件なり。

凡そ他人と會見して何事をか語らんとするに際しては、胸中十分の確信を以て支配せられ如何なることありとも、自己の心を他に奪はるゝが如きことあるべからず、『貴顯紳士の前に臨んでは何となく臆して、十分に所思を發表すること能はず』など、言ふは、吾人の屢々耳にする所

なるが、此の如き人こそ眞に以て、自信力の缺乏を表するにあらずや、

粉飾を俟つの要なし

元來自信力さへ充實して缺くる所なからんには、假令如何なる先輩の前に臨むも、將た又如何なる地位高き紳士と貴顯の前にあるも、苟くも禮節に於て失態なからん限りは、赤面、劈易、周章、狼狽して、言語の流暢なる發露を妨ぐべきものにあらず、自己が正當と信じ、疚しからぬと思ひたることを語るに於ては、何の憚る所あるべきか、又何の恐るゝ所あるべきか、自己の信ずる所ならば、慚せず屈せずして、諄々と説き去りて泰然たる態度あるこそ男子らしき舉動にして、又貴むべきの行爲にあらざるなきか、

談話の巧妙なるは、自然にして、粉飾を加へず、有の儘に述べ立つるにあ

り故らに虚飾の言を吐き或は不自然の語を發するは決して流暢にもあらず巧妙にもあらずして實に尤も忌はしきこといふべし然るに前後を回顧し或は恐れ或は憂ひて此の言語を發せば失態を見るに至るべきや又此の態度に出づれば何等かの悪感を抱かしむるに至るべきやなど徒らに躊躇するのみならんには其言語の自から遲滯に陥り或は活氣を缺き或は前後撞着するが如き無作法を見るに至るは自然の結果のみ

他人に不快を感じしむ

苟くも人にして眞個の自信力に富み自己の胸中に存する所をば遲滯なく他人の間に立ちて談じ得るものならんには其言語は悉く流暢に出で活氣に富み他人に對して快感を起すべき性質のものとなるに至るべし故に敢て無理にも流暢自然に赴くべき言語を發するの必要なし否強ひて斯くせんことを欲するに於ては却つて沈滯して一言一句悉く不自然的のものに化し圓滿快活の本質を失するに至るは眞に争ふべからざるの事實なり

吾人は言語の要領を得ずして常に逡巡躊躇をなすものあるを見る毎に極めて不快の感を起さずんばあらず彼や自ら言はんとする所を言はんとするにもあらず將た又他人に對して自己の所見を十分に陳述するにもあらずして極めて曖昧に極めて陰鬱の中に時間を經過せんとするなり吾人は彼の眞意の何れに存するかを解すること能はざるのみならず又其態度の如何にも野卑賤劣にして常識を失せるの甚きを憫まらずんばあらず苟くも人にして談話をなさんと欲せずんば即ち止む然らざる以上は如何なる理由よりするも斯かる拙劣無作法の處

置に出づるの必要あらんや、

勇氣にて一心を支配せよ

自信力を完全に發揮して自己の所見を十分に陳述し、毫も他人の前に臨むとも慮する所なからんと欲する以上は、是非とも滿腔の勇氣と確固不動の觀念を把持する所なかるべからず、確信と勇氣の缺如する時は、必ずや自信力を失するに至る、已に自信力を缺く以上は、其言語の自然に沮滯に失し、作法の圓滑を缺き、人に對して不快の感を抱かしむるに至るべし、

故に自己の言語の流暢を缺き、作法の圓滑に至らざるを憂へなば、先づ其基礎たるべき滿腔の勇氣と滿腹の確信力を涵養するを期せよ、事茲に至らば、如何なる人にもありても、其言語の流暢に赴き、其作法の宜きに

協ひ、一言一句といへども、十分に他人を感動せしむるの域に達せん、不自然に渉るべき言語の吐露は、十分之を慎まざるべからず、如何にも虚飾の調を具えて思はしきものなり、此の如きは、畢竟するに胸中にて一定の所見なく、又眞實熱誠の觀念なきより出るものなり、無理にも言語を發して、腹にもなき虚飾を表示せんとするの結果は、必ずや其虚榮虚飾の極たるを洞見せらるべき場合に迫らるべし、此の如き人の心事ほど賤むべく、思はしきものは他に其比類を見ざるなり、謹むべきは此の種の態度なるかな、常に十分の勇氣と確信を以て自信力を起し、自己の言動を左右せざるべき決心を立てられよ、然らば自己の談話は、自から流暢明快に至るべく、自己の作法は、如何にも圓滿巧妙にして、自然的態度を逸するの憂ひなかるべし、要するに談話と應待は、決して區々なる外部の虚飾にあら

ずして、一言一舉悉く是れ自己の心中を外部に表示するものなれば、從て人の作法と談話に因て十分其心を讀破し得らるゝものたることを、心中に銘記し置かんには、如何なる場合に際しても心得違ひのあるべきものにあらざる也。

第四章 簡潔と敏速

頓才の神髓如何

巧妙の談話家として成功し、且つ應待の道に於て遺憾なからんと欲するものは、宜しく常に簡潔の一事を心中に銘記して、一日といへども否々一刻といへども之を忘却するが如きことあるべからず、此の注意的

警告は如何程屢々之を反覆したりとても無益の業にあらざるべければ、注意の上に注意を加へて、必ず遺漏なきやう力めざるべからず、西人の諺に曰く「簡潔は頓才の神髓なり」と然れども、獨り頓才の發揮に於てのみ、然るに、あらずして、談話の如きに於ても、特に最も然るべく、又最も必要なるを見るなり、若しも心中に於て簡潔の何たるを悟るべき念なく、又之に達すべく力むることなくんば、萬事を擧げて、冗長に流れしめ、極端に涉らしめ、延て其結果の及ぶ所は決して鮮少にあらざ、敏活の人たらんと欲せば、此の點に於て三省する所なかるべからず、人の談話をして趣味を帯ばしめ、人の品性をして光輝を發せしめ、人物の價值を増進する所以のものは、一に是れ簡潔適切の言をなすものにあらずや、彼れ簡潔の言をなすものに於ては、其言ふところ一々剴切にして、肯綮を穿ち、得るのみならず、十分に自己の所見を徹底し得るに至

るものなり、加之簡潔の言をなす人に於ては、貴重の時を省約し、他人に對して迷惑を懸くことなく、自家に取りても、冗贅多辯を要するの勞を去るが故に、其間に得べき利益に至りては、到底筆紙に盡し得ざるものあり、然かも斯くありては、事物を處理するに事を缺くやといふに、決して左にあらざして、何等の不便もなく、又何等の不足もなく、十分主意を貫徹し得るに至るものなり。

勞して益なきの人

世上の青年輩が經驗に於て足らざるや、巧妙の談話家たるべき資格としては、是非とも饒舌喃喃々として、舌端花を咲かせずんば、理想的人物にあらざるが如く心得え、現在無用と知りつゝも、冗漫なる言語を反覆して、自他に對して非常の迷惑を來すも、意にせざるもの多し、然るに世人

は之を見て、『能辯家』なり、『流暢の談話家』と見做すかといふに、決して然らずして、實は、『無思慮にして迂濶なる空談家』として受取らるゝのみ、勞して効なきのみならば、稍々恕すべきも、勞して害ありといふに至ては、如何にも割に合はぬ次第にあらざるなきか。

簡潔適切な言を發せざるものは、必ずや迂濶贅冗の言を發して貴重の時間を空費するに至るは、掩ふべからず、實務處理に於ては、何事も總て簡潔を以て第一とし、之に反する行爲を排斥せざるべからず、簡潔の言は一語千金の重きをなすのみならず、寧ろ金錢に代へ難き程の眞價あるものなり、之れに反して冗長の言が、如何程迄に自他に迷惑を及ぼすに至るかは、當局實務家の等く知悉する所なるべく、吾人は改めて茲に陳辯をなすの必要を認めず。

歐米人の見地如何

聞く歐米の實務家が青年の斯界に入らんとするものを採用するに於ては、悉く其一言一行に注目し、苟くも贅冗迂濶の言を發するものあらば、實務家としての資格なきものと判断し、之を排斥すといふ、此種の傾向は米國に於て尤も甚しく、現在十分の教育を有し、相當の才幹を抱ける有爲の青年も、斯かる細事のために一身立脚の地位を失ふに至るもの尠なからずと、此の如き米國主義は、一方より見れば、稍々極端の嫌なきにあらずといへども、之れに就て見るも如何に簡潔適切の費ぶべく重大なるかを窺ふに足るべし、

縦しや、實務に従事せざるの時即ち友人數名相集會して座談をなすの際の如きは、素と是れ一種の娛樂的集會なれば、如何なる言動に亘りて

も差支なきが如しと雖も、其實此の時に於ても簡潔の必要を感ずると切なる也、見よ斯の場合に於て戯言滑稽を弄するにせよ、苟くも冗長にして簡潔に協ふことなくんば、彼や如何にも「間の抜けたる男なり」「要領を得ざる言を吐くものなり」「拙劣の駄洒落をいふ男なり」として、一座の輩の嘲笑若くは冷評を蒙るに至るは争ふべくもあらず、満座の中にて恐くは一人とても「成程巧妙に言語を弄する人なり」など、感服するものは、斷じて之なかるべし、得失償ふに足らずとは、斯かる人の心事をいふにあらずや、

凡そ如何なる種類の談話たるを問はず、總て是れ要領を得るを主眼とせざるべからず、固より達意の中にも、自ら一種の潤飾を要するは何人も知る所ならんも、こは是れ要領に達して後の話なり、已に要領を得たる以上は、自己の目的を達したるものとして、談話を止め、若くは辭して

退去をなすべきを明示するの時にあらずとせんや、
 以上反覆して説明したる所に徴して、言語の簡潔の果して何たるかは
 十分に知悉したるものなるべしといへども、一言以て之を掩へば左の
 如し、

談話上の八大要件

- (一) 先づ直接自己の用務に必要な點のみを語るべし、
- (二) 明晰爽快なる調子にて談話せよ、
- (三) 實務處理の場合に於ては決して閑問題に口を容るべからず、
- (四) 然れども必要の場合に於ては長き時間も之を辭すべからず、是れ
 蓋し簡潔の範圍に屬すれば也、
- (五) 眞面目の中に愛嬌を含みつゝ語るを要す、先方が不都合の行爲あ

りとも、怒氣を含んで應接すべからず、

- (六) 冗長迂濶は悪けれど、急卒、輕忽に亘るべからず、
- (七) 出來得る丈け談話に順序を立て、秩序的に語るべし、
- (八) 先輩の巧妙適切なる談話に倣ひ、其美風を參酌して自己の一身に
 適應せよ、

作法と言語の關係

更に又言語と作法との間には密接の關係あるを忘るべからず、是れ
 何人に取りても緊要のことなり、故を以て常に簡潔にして適切の言
 を發する程の人は、其應待の用意に於ても如何にも機敏快活にして、茫
 然自失するが如き顔色をなさぬものなり、思ふに談話を爲すと將た又
 應待をなすの精神も、總て是れ同一の意思を通じて現はるものなれ

ば、一方談話に於て巧妙適切を極むるの人が其應待の道に於て迂濶冗長に亘るべしとは思はれざるものなればなり、應待の道に於て敏活、巧妙、機智に富み、言語に於て常に簡潔、適切に出づるの人は如何ばかり他人に快感を起さしむべきや殆んど計るべからざるものなり、又之と反對に要領を得難き迂濶冗長の言語を弄して毫も顧みざるの人においてはその動作如何にも調子を失して、其談話は何となく氣拔けして茫然自失したるを表す、縦し敏捷の人にあらざとも、常人も之を一見せば直に其愚昧淡たるを看破すべし、青年にして文明的偉大の人物として何れの社會に處しても恥かしからぬ身たらんことを欲するものは、よろしく常に言語の簡潔と作法の敏速にして適切に協ふべきことを心懸けて、十分の注意をなすに吝なるべからず、自己若し此點に於て十分熟達せざるものあるを見れば、よろ

しく常に自己の注意力を喚起して何れの點が迂濶なるや、又何れの所が果して冗贅なるやを確かめ、一日も早く之を矯正して完璧を期せざるべからず、處世的成功は自から此の中に含蓄せらるものなれば、雄飛活動の一步は茲に有することと悟られよ。

第五章 傾聽的性格を訓練せよ

人格の高潔を表す

談話に於て巧妙の域に入り、他人をして快感を起さしめ、自己に對して同情を寄せしめんと欲せば、先づ自ら語るよりも寧ろ他人の談話を傾聽すべき緻密なる性情を訓練せざるべからず、

傾聽の一事を以て區々取るに足らずとして看過することなかれ是れ一面に於ては人格の高潔雄大なるを表すのみならず又他の一面よりすれば品性の善美にして常人に超絶する所あるを示し談話法中の重大なる要素を形成するものとして深き注意を拂ふ所なかるべからず

傾聽の人は、少くとも其人物の沈靜健穩にして狂熱的奔逸的ならざるを證明して餘りありとす、又或る意味に於ては極めて強き忍耐力を有する忠實の人なりといふも失當にあらざるを知るべし、先づ他人の言ふ所に對して十分に自己の耳を假して傾聽するは、禮節の上より見るも其人に對して鄭重親切の作法なり、是れ人間としては如何にも興味しく、然かも眞面目なるを意味するものにあらずや、

半聽半忘は不可也

然り、傾聽の態度を遵奉して違犯する所なきの人は、確かに鄭重にして禮節に協ひたるものと稱すべし、又實際に於て見るも、誠實謹直の念なくしては、他人の言に對して鄭重を期すること能はずして之を蔑視するの傾向を生ずるに至るは、免るべくもあらず、實務處理に亘る談話に對しては、十分に傾聽し、一言一句といへども苟くもすべからず、何となれば若し聊かたりとも此の域を脱することあらんには、實務の處理を誤りて一大失態を招くは言を俟たずして明白なるべければなり、然れども實務以外のことと雖も、之を度外視し、之を傾聽せずして半聽半忘の中に葬り去りて可なるものにあらず、苟くも他人と相對して直接言語を交換する以上は、先づ一應は先方の陳述す

る所を聴きて、毫も之を輕卒に附するが如きことあるべからず。若し然らずんば、是れ實に他人に對して、間接に侮辱を加へたるに均しく、此上もなき失態といふべし。交際社會に於ては、之がために自己が將來の名聲を失墜するに至ることあるは、各人の實驗に徴して見るも明白なるべし。

陋劣、下賤の行爲

若し夫れ他人の談話を中途に遮斷して強く自己の所見を陳述せんとするが如きは、單に尊大不遜の極なるのみならず、其作法の陋劣、下賤にして、識者の眼より見れば、寧ろ憐むべきの人といふべし。身教育あるものにして此の如き行爲ありとせば、彼や確かに無學者にも劣るべき人物にして、人間として品性を備ふるものとは受取れず。

彼れ、下等社會の無教育の徒が互に論議をなすを見ずや、彼等は忽にして喧囂の聲を洩らし、忽ちにして叱咤罵詈に變じ、先方の言ふ所の理非如何をも辯別せず、又十分に先方の言ふ所をも傾聽せずして、漫然として互に惡口を交へ、果ては互に掴み合ひさへも辭せざるに至るものなり。彼等にありては謙退辭讓の念もなく、鄭重の心もなく、又他人の言に對する尊敬の意あるにあらずして、常に賤劣不遜の無作法を演ずるなり。

下等社會の勞働階級に屬するものが此種の行爲あるは、稍、恕すべきも、苟くも教育ありて將來の大成に志すものが之と同様の行爲を演ずるは、此上もなき恥辱の極にあらずとせんや。

最良の談話家

他人の言ふ所に對して傾聽を表するは最良の談話家として最も貴むべき者なり西諺にも「最良の談話家は最良の傾聽者なり」といへり然るに無學にして禮を知らざる無思慮の徒にありては此の區別の存する所を知らず漫然空言を弄し冗贅の言語にても苟くも多きに亘るあればこれを優秀の談話家なりと心得えて前後の別もなく饒舌喃喃として他人に迷惑を蒙らすこと少なからぬものあり無分別も亦甚しきことならずや

巧妙なる談話家になればなる程愈々以て他人の言に十分の傾聽を表し善く其の意を諒したる上に於て之れに對して自己の意見を發表して可否如何を言ふも未だ嘗て他人の言を遮てまでも強て自己の所見を陳述せんとするが如き不遜傲慢の作法に出づることなし左れば彼にありては一言一句といへども他人の意見を聞き誤り若くは誤解をな

して他人に迷惑を懸くるが如きことなく其用意の周匝緻密なる其態度の圓滿充實せる如何なる點より見るも非難を容るゝの餘地あるなし此の如き人こそ眞に快活なる巧妙の談話家と稱すべけれ

不得要領に終るべし

他人の言ふ所に對して傾聽の念なきものは其人必ず野卑賤劣にして人間としては尤も忌むべき種類に屬す斯の如き人は他人の言に就ては一知半解にして中途に嘴を容れ自ら其の要點を領せるが如く得々たれど其の實相手の眞意は未だ十分自己の胸中に徹底せざるものにして事を處するにも人に對するにも忠實正直方正の念を缺如するものにして人生を圓滿に涉るべき要訣を忘却したるものなり左れば先方の方は果して何を言ひたるものなりやと問はるゝに於ては十分に

之を心中に記憶する所なきが故に、殆んど不得要領の挨拶をなして、一時を彌縫せんと試むるものなり、是れ勿論止を得ざるの理なるべし、何となれば他人の言に對して傾聴をなすには、自己の心を沈靜にして、自分の注意力を用ひざるべからざるも、彼や此の點を缺くが故に、談話の終ると共に、自己の記憶力も茫然として消滅し、之を捕捉するに由なればなり、

斯の如き人物は品性に於ても最も劣等なるものにして、何人も之を信任するものはあらざるべし、彼や一人の親友だになく、十中の八九迄は、碌々他人にも相手にせられず、從て自己の失敗と不幸を悔ゆるの時は、遠からずして到着するなるべし、

不和の基を作るの人

凡そ如何なる人に論なく、言語動作に於て冷遇を蒙るは極めて不快を感ずるものなり、他人が現在熱心に談話しつゝあるにも、關はらず、或は冷評を加へ、或は他の方面を見て、碌々之を聞かざるが如きは、實に一大侮辱を與へたるものといふべし、特に眞面目に語りつゝあるに際して、新聞紙を読みながら、『成程！』『ハア、！』『ア、そうですか』『如何にも』など首肯しつゝあるは、最も忌むべく禁せざるべからざることゝ屬す、上長者が部下のものに對する態度としてすら、此の如きは甚だ以て感服せざるものに、況して對等者間若くは先輩に對しても、之に類する行爲に出づるは、人に對するの禮節を辨知せざるのみならず、其實は他人を蔑視するの甚しきものにして、之がため叱咤罵詈暴言を加へらるゝとも、一言も辯解の餘地なかるべし、

他人の言を傾聴するは、決して自己の身を卑下するの行爲にもあらず、

將た又自己の肩身を狭むる道にもあらずして、談話に於ては巧妙の域に達せしめ、作法としては他人に十分の満足と信任を措かしむべき一舉兩得の便法と稱すべき也。

他人の信任を博する所以

自己の尊重せられんことを欲せば、先づ他人を尊重すべき決心なかるべからず、他人の言に對して十分の傾聴をなし、之に尊敬を表するは、自己の談話する時に於ても、同一の尊敬と信任を表せらるべき所以の道のみ、斯の如きは道路の荆棘を排して成功の道を開拓するに足るべし。談話はよろしく先づ先方の談話家の言ふ所を十分に聴き取り、愈々自己の意見を陳述すべき場合に於て、臆せず、恐れず、靜かに其の思ふ所を吐露するを要す、斯く爲すに於ては、自己の談話は行雲流水の如く、流暢

明快に至るべく、其の接待應酬の作法に於ても、渾然として能く圓滿快活にして、錯誤する所なきに至らん、活社會に於ける有用の人物は必ずや此種の模範のものならざるべからず、是れ吾人の注意すべき大切なことにあらずや。

第六章 謙退辭讓の精神

快活の原動力

談話に一層の趣味を添へしめ、他人に一大快感を起さしむべき原動力は、談話の際に於ける謙退辭讓の精神に外ならず、不遜傲慢が到底爲し得ざる所のものすらも、謙退辭讓の行爲に因て十分に自己を利益に導

か、い、め、自、己、の、談、話、に、對、し、て、耳、を、傾、く、る、に、熱、心、な、ら、し、む、る、も、の、な、り、是、れ、輕、薄、な、る、小、才、士、流、の、到、底、解、す、る、こ、と、能、は、さ、る、所、の、も、の、に、し、て、眞、摯、熱、誠、な、る、も、の、の、み、善、く、這、般、の、消、息、を、悟、り、得、べ、し、

人、の、品、性、を、高、め、威、嚴、を、保、ち、他、人、の、信、用、を、博、し、自、己、に、於、て、も、最、も、愉、快、と、満、足、を、な、す、に、至、る、べ、き、は、一、に、是、れ、謙、退、辭、讓、に、存、す、る、も、の、に、し、て、外、觀、力、な、き、が、如、く、見、え、て、其、實、萬、人、を、左、右、し、得、べ、き、程、の、一、大、潛、勢、力、を、有、す、る、も、の、な、り、天、下、之、に、も、優、り、て、貴、む、べ、き、も、の、あ、ら、ん、や、

勿、論、何、事、を、な、す、に、も、程、度、あ、る、も、の、に、て、苟、く、も、其、程、度、を、超、ゆ、れ、ば、皆、是、れ、圓、滿、を、缺、く、に、至、る、も、の、な、り、謙、退、辭、讓、は、何、れ、の、點、よ、り、見、て、も、美、徳、と、し、て、貴、む、べ、く、力、む、べ、き、こ、と、に、は、相、違、な、き、も、極、度、の、謙、退、は、往、々、に、し、て、因、循、薄、弱、の、品、性、と、解、せ、ら、る、い、の、み、な、ら、ず、實、際、に、於、て、薄、弱、因、循、臆、病、の、行、爲、た、る、を、表、す、べ、き、も、の、な、り、左、れ、ば、吾、人、は、常、に、人、に、臨、む、毎、に、不、遜、專

横、の、行、爲、を、排、除、し、て、絶、へ、ず、反、省、す、る、の、必、要、あ、る、と、同、時、に、極、端、な、る、謙、退、辭、讓、を、守、り、て、自、己、特、有、の、美、點、を、誤、解、せ、ら、る、い、が、如、き、失、態、を、演、ぜ、ざ、る、や、う、一、層、注、意、す、る、所、な、か、る、べ、か、ら、ず、

自負的口吻を避けよ

談話の席に於て『我輩を以て見れば……』など反覆し、或は『貴下の意見は然るべきも、我輩の見る所は遙かに之に勝るものなるを斷言す』など言ひ、或は『我輩は此のことに對しては十分の知識を有すれば、毫も間違の生ずべきことなし』など前提をなしつゝ、陳辯して得々たるものありといへども、此の如きは、毫も謙退辭讓の精神を有するものと見ることは、能はず、否々、寧ろ、是れ、他人を卑下し、自ら高くを標榜する、尊大不遜の態度たるものにして、其の結果は、自家の無學、無智の身たるを、表示するに

均し、

斯の如き人によりては、秋毫だも謙退の精神もなければ、又他人のため
 に一步を譲るといふ美はしき精神を備ふることなし。元來此の如き人
 は、其人物に於て忌はしきのみならず、其品性如何にも卑吝にして、他人
 に迷惑を懸くることには毫も頓着せぬものなり。
 極端に亘るべき行爲を避くるは、謙退辭讓の特色にして、人物の品位を
 高むること幾何なるや計り知るべからず、彼れ謙退を知らず、辭讓を解
 せざるの徒は、何事に就ても、自家のみ得意の色を示し、人に對して傲慢
 極まる態度に出るを常とす、左れば、其一舉一動悉く是れ常識を逸し、專
 横に出て、人のために圖るの意なく、只是れ自己の利益を貪るに汲々
 たるべきも、何んぞ知らん、是れ却て自己の利益を喪失せしめ、自己の人
 格を卑下せしめ、他人の同情心を失するの基たるを、

謙退辭讓の人は、其言語は必ずや穩健なり、霸氣満々たるが如き偉觀壯
 觀は、縦し之を求め難きにせよ、質實の中に於て自ら一種獨特の光輝を
 放ち、圓滿にして、周匝沈着にして、明快の行爲に富むものなり、吾人の耳
 を清ふし、心を快活ならしむるものは、確かに此種の人物の談話にして、
 一言一句の中にも得易からざる教訓を含蓄するものなり、此種の人の
 談話は、到る所に歓迎を受けて喝采せらるゝのみならず、其言語には一
 種獨特の威力を備へて、動かすべからざるものあるは、何人も直ちに之
 を看破し得る所なり、

日常生活は演說會にあらず

彼や固より滔々として雄辯四遊を驚かすの光景を缺くものあらん、然
 れども、吾人が日常生活は決して雄辯的生活にあらず、又日常の談話

は、決して演説會に、あらず、天性に背て、無理にも雄辯家たるの必要もなければ、又斯の域に至りたると、別に何の利益だにあることなし、談話の目的は決して斯かる區々たる細事にあらずして、單に意思表白て一事を達するにあるのみ、果して然らば何を好んで斯かる奇矯の行爲に出るにや、謙退辭讓の中に於ても、十分に自己の主たる用務を辨じ、品性を發揮し、満座の人に對して快感を起さしむることは、極めて易々たるの行爲にあらずや、

假りに百歩を譲りて、謙退辭讓の精神に因て言語に活氣を缺き、談話に一大彩色を帯びて、列座の人を驚嘆せしむべき光景なしとするも、果して何の不利益ありや、言語は多少活氣を缺くにせよ、苟くも人にして眞摯の念を以て語り、熱心より出でたるものならんには、言語上の缺點の如きは、何人も之を容赦して、呉るべく、故らに一言一句に拘泥して、追窮

する程の人は、文明の今日に於ては、恐らくば一人にてもあらざるべし、

叩けば鳴る人間

知りたる所を知りたりと公言するは、如何にも男らしく勇氣に富める行爲なれど、知りて猶且つ知らざるが如く、謙退するは、更に之よりも優れる、知者の行爲にあらずや、彼には堂々たる覇氣の見るべきなく、鬱勃たる元氣は或はなかるべきも、奥床しくして底の知れざる程の光景は、確かに茲に存するにあらずや、謙退辭讓なるものは、此の如く奥床しく底の知れざる所に存するものにして、之がために愚者たりと思はるゝにもあらざるべく、將た又無學者として見らるゝものにもあらず、叩けば鳴る人とは、確かに謙退辭讓の精神に富めるものをいふにあらずや、他人を感動せしむるも、將た又言語に無駄の辭句なきも、總て是れ此種

の人に就て求めらるべきもののみ、
叩かずして鳴る者あり、甚きは鳴り續けに鳴る者あり、優婉にして困難
清趣ある光景は果して何くに求むべきや、今日の青年の多くは、滔々と
して此種の模型に入るべきものにして、一言以て之を掩へば、不遜、尊大
の氣風は存すべきも、謙退辭讓の精神に至りては、殆んど弊にしたき程
も之あるを見ず、其極陋劣下賤の行爲に亘るも亦止むを得ざるかな、

千金の重みある言語

謙退辭讓とは別に奇矯に出るにも及ばず、將た又自己の必要なる言語
を抑制して人知れず心を憐ますにも當らず、たゞ人間として盡すべき
適當の行爲に出づるにあるのみ、謙退辭讓なる人の言語は自ら緊肅し
て千金の重をなし、對照宜きに協ひ、談話の模型よりして見るも、決して

卑むべきものにあらざるのみならず、却て一層の品位と光彩を添ゆる
ものなり、

談話と作法とは必ず常に相伴ひて離るべからざるものにして、品位あ
る談話としては、二者各々一を缺くべからず、然るに世の下賤陋劣にし
て事理を辨ぜざるの人に於ては、之を解釋するの力なきに因るにや、殆
んど之を無視して、之に對する周匝緻密の意思を用ひず、漫然口舌を弄
すること鸚鵡の如く喋々すれば、作法の如きは毫も顧みるに足らざる
が如く、思惟して、談話に要すべき謙退辭讓の精神を没却し、自ら得々然
たる者あり、斯の如きは畢竟するに、談話の秘訣を悟らざるの愚昧、漢に
して、其行爲の已に極端に異なるものあるや、疑を容れず、左れば其談話は
他人よりして冷評諷刺を以て迎へられ、誠實眞情を込めて之と語るも
のなきに至る、

如何なる場合に臨むとも斷じて謙退辭讓を忘れて不遜專横に涉ることなかれ、縦しや謙退のために多少の不利を招くことありとするも、此種の不利は容易に恢復せられ易き性質のものにして決して恐るべく愛ふべきものにあらず、之れに反して不遜專横に因て自己の一時的热情を洩らして快然たるに於ては、後日必ず悔悟すべきの時は到底せんのみ、談話の法に通曉せんとするものは、此點に於ても輕々に附するべからず。

第七章 傲慢と議論

談話上の一大禁物

談話家として自己の所見を快活に語り且つ他人をして自己の言ふ所に對して無限の信任を措かしめんと欲せば、よろしく傲慢の態度と議論に亘るべき諸般の事項を警戒し、如何なることありとも斷じて斯かる失態を演じて自己の面目を損することあるべからず、手は已に幾度も反覆して叙述したるが如く、傲慢は談話上の禁物なれば、常に之に陥るを避けて、謙退辭讓の精神を遵奉せざる可らざるの必要あるものなり、凡そ心に傲慢の情の抑へ難きときは、必ずや他人を卑下し、且つ之を輕侮すべき念慮の生ずるを禁じ難きものなり、而して斯の如き性行の結果としては必ずや之を言動に現はし、他人をして不快の念を抱かしむるに至るは勿論のこと、遂には平和なる友誼さへも斷絶せしむるに至るべし、

人一旦此の如き場合に至らば、其言語は如何程巧妙なりとも、又其遁辭

は如何程迄に機敏を極むといへども、他人は之に對して、言に信任を措かざるのみかは、却て之を賤み、此の如き輩と語を交へんよりは、寧ろ孤立して讀書でもするに如かずとの念を抱くに至るべし。

優婉の作法と穩健の態度

凡そ言語に光彩と添へしむるものは、其措辭の巧妙にして洗鍊に達するに存すといはんよりは、寧ろ其作法の優婉にして其態度の穩健なるに存するものなり。如何程巧妙の談話も、苟くも其談話家の作法、態度にして露骨に過ぎ、野卑に出て、優婉を缺き、下賤陋劣の行爲あらんには、其談話に一大汚點を染めしめ、之をして見るに足らざるに至らしむ。是れ青年の尤も注意を要すべき一大問題たるものなり。傲慢の如きは、確かに談話に一大汚點を添へしめ、又其作法を卑賤なら

しめ、其態度を陋劣に導かしむべき一大原因を爲すものなれば、嚴に之を遠げざるべからず。今日青年輩が稍々もすれば、取るにも足らぬ小事に對してすら、議論を挟み、口角沫を飛ばして、自己の主張を貫徹せんとするは、確かに傲慢と虚榮心とに支配せらるゝの結果なりと斷言するに躊躇せず、眞に悲むべきの現象といはざるを得ず。心得違ひも茲に至りて極まれり。

議論の必要を認むべきや

借問す、自己の主張を貫徹するには、果して議論の必要を認むべきにや、議論なくして何事をも語り得ざるべしか。ア、何んぞ夫れ然らん、議論をなすが如きは——普通の坐談の場合に於て——確かに修養の足らざるものにして、其品性に於ても隨分疑はしき人間といはざるを

得ず、加之大抵の場合に於て、議論に於て他人を屈服したりとするも、他人は是に因て十分に信服を爲し、如何にも貴説の如し」と快諾を表すべきやといふに決して然らずして敗北したる場合に於ても、自己の敗北を承認せず、依然として自己の正當を主張するものなり、故に議論に於て勝つも、何等の効果なきものなれば、寧ろ始めより議論を避けて、圓滑に然かも巧妙に自己の所見を陳述し、先方をして信任せしむること賢き道といふべけれ、是れ亦談話を潤飾せしむる一大秘訣にして、自己の處世的成功を博すべき活法と稱すべけれ、加之議論をなすの極は往々狂熱に過ぐるよりして、極端の言語を吐き、不快の辭句を弄して、他人に一方ならぬ不快の感を起さしめ、果ては厭惡の情を生じて、圓滿なる友誼を損じ、絶交の基を作るに至ることは、世上屢々有り勝ちのことなり、

議論家は一種の性僻

兎角議論的口吻を弄して得々たる人は、議論をなすべき問題なくんば、強て其問題を作り、相手の人を苦むること、妙なからぬものあり、此の如きは、番に談話の妙味を解せざるのみならず、又實に如才なき處世の道を忘却するものにして、其品性は尤も思ひべく疑はしきものと斷言するもの決して、輕率にあらざるを信ず、積年の交誼も一朝の議論に因て破らるゝが如きは、吾人の往々目撃するところにして、眞に忌はしきことといふべし、

元來議論を好むが如き人間は、已に叙せるが如く、實はつまらぬ人間ならば、之を相手として眞面目に談話するを避くるこそ賢き方法なりといへども、強て之を避くるに汲々たるは、是れ亦議論家をして悪口と不

快をなさしむべき口實を作らしむるものなれば斯かる場合に處する
 第一の秘訣としては成るべく議論となるべきものよりして他の問題
 に移らしめ相手をして議論を挟むの餘地なからしむると同時に出來
 得る限りは滑稽の問題に移らしめ笑談の中に鋭鋒を挫くに至らしむ
 るは談話家として巧妙の頓才なるのみならず併せて又機宜に協ひた
 るものといふべし

是れ一種の勝利なり

此の如くするに於ては流石の議論家も其議論をなすの端緒を見出す
 に苦み果ては相互に打ち笑ひて事なく圓滿に其場を過ぎ得るもの
 なり平素人に接するに此の如き方法を以てするに於ては厄介極まる
 議論家を避け得るのみならず自己の快活を損せずして十分其談話を

持續し得べきものなれば談話家として其手腕を發揮せんと欲せば必
 ず之を不問に附すべからず議論の戒むべき所以は其極往々罵詈誶
 の言を弄し甚きに至りては高聲を發して絶叫し周囲の状態如何さへ
 も頓着せざるにありこは是れ議論家に免れ難き所なり此の如きは單
 に談話の上よりせざるも作法の上より見て人間の行爲として認むべ
 からざるものにあらずや少くとも教養ある紳士としての作法にあら
 ざることい信ず自己は之に因て大に其積鬱を洩らし自己の感情の慾
 を洩らしたるものとして見るべきも其實之に因て自己の品性に一大
 汚點を染めしめ併せて無賴漢と其伍を同ふすることを表示するもの
 といふべし慎まざるべからず

誹謗の言を慎め

現在其場に居合はさるるの人なりとも之に對して誹謗罵詈の言を弄するることなかれ「壁に耳あり」との古諺の如く此種の惡口は何時とはなしに他人の耳に傳播して被謗者の許に達するに至るべし之を聞きたる本人は果して如何なる感を起すに至るべきか問はても判明し得ることならずや然るに無智無思慮の人において少しく自己の快く思はざることあれば不在の人に對して酷評を加へ果ては謬謗の言を弄して顧みざるもの尠ならずといへども此の如きは是れ亦忌むべき人物たるを表示するなり况んや此種の談話は其性質の上よりするも決して清新快活の感に入りたるものといふこと能はざるのみならず寧ろ談話の趣味を損するをや

畢竟するに間接と直接とに論なく他人に誹謗の言を加ふるは是れ實に他人を侮辱したるものにして其罪決して許し難く喧嘩の種子を播き厭惡の基を作るものにして何れも不遜倨傲にして謙退辭讓の念厚からず事なきに取て議論を上下するを以て唯一の僻となすより起れるものにして圓滿なる人心を打破すること甚し

吾人は議論に馳するを避け何處迄も鄭重優婉の作法を以て欣然として溫言以て其所見を陳述するの勇氣なかるべからず議論家の目よりすれば之を以て或は「臆病漢なり」「卑屈漢の行爲なり」として一笑に附することありといへども其實は卑屈にも臆病にもあらずして穩健なる人物として務むべき尤も圓滿周匝の態度なりとす若し夫れ之がために如何程善く談話を潤飾し品性に一大光彩を帶はしめ人心を驅りて清新快活の感を起さしむるに至るべきかは茲に一々絮説を試むるの要を見ざる也

第八章 快感を與ふは第一

人心の美的光輝

應待と談話をして一大光輝を發せしめ品性の圓滿充實して常人を凌駕し且つ社交の才に因て幾多の友人を作り圓轉滑脱克く處世の道を開拓する所以のものは一に夫れ快活心にあるかな快活心は人心の美的光輝なり之を譬ふれば宛かも温き太陽の光輝が到る所に草木を生育せしめ風景を明媚ならしめ四圍の面目をして清新の趣味を呈せしむるが如く快活心の與ふる勢力は意外に強大にして權力暴力を以て動かすべからざるものを十分動かし之を左右して翻掀せしむることは寧ろ吾人が思料の外にあることを記憶せざるべからず左れば憂鬱陰暗にして沈憂の人が到る處に於て他人の指彈を受け碌々に相手と

せられざるに反し快活心に富める人が何れに行くとしても同情心を以て迎へられざるなきは勿論のこと他人をして一言の力善く信任をなさいめ直接間接に及ぼす効果の大なるは言語を以て之を説明し難きものべし

一に氣質の鍛錬にあり

快活心を發揮すべき方法種々ありて逐一之を指摘するに堪へずといへども要するに自己の氣質を鍛錬して克己制慾の眞價を表白するに外ならず勿論或少數の人によりては別に何等の訓練を要せずして善く常に快活と歡喜の狀貌を呈し如何なる人に接しても不快の態度に出でざるは言ふ迄もなく愛嬌の中に明快の言語を發して如何なる人に應接するも一見舊知の如き感あり何人も斯の如き人の例に倣ひて

天賦の才幹を發揮するは、誠に望まじきことにして、是非とも斯くありたきものなり、然れども天賦の性行善く快活心に乏しきものとするも、苟くも自ら力めて快活心を示さんとするの決心あり、且つ日常の注意を怠ることなくんば、事に臨み、物に觸れて必ず善く其快活心を表示し得るに至るべきは、吾人の一々之を説明する迄もなき所なり。

若し夫れ天性極めて快活にして他人の細事を指摘するが如き心事なきものに於ても、苟くも如上の要項に着目せず、自己の専横心を以て萬事を處せんとするの念動かんには、之がため天性の快活心を打破して見るなきに至らしむるは、毫も疑を容れず。

予は今其要點のみを擧げて簡潔に快活心訓練の道を叙述せんと欲す。

快活心訓練の六大要件

(一) 悪口を言ふなかれ、他人に對しては現在其場に居合はすと否とを論せず、決して悪口、讒言などをなすべからず、兎角此種の言語は他人をして不快の念を起さしめ、且つ憤怒を挑發せしめ、易きものなれば、謹んで之を口外せざるやうにすべし。

不在者に對しては多少の悪口讒言をなしたりとて差支なしと思ふものあらんも、是れ絶對的謬見にして思慮深き人の行爲として見るべからず、縦しや不在の人は之を知らざるにせよ、心ある人に於ては漫然として悪口、讒言をなすが如き人に對しては決して快心を以て迎へざるのみならず、十中の八九迄は厭惡、不快の所感を生ずるに至るべし、是れ實に他人の心底に一大打撃を與ふるものにして、自己が力めて快活心を發揮せんとするも、他人は之を聞流して眞面目に相手として受取らざるべく、結局何の得る所なきに

終るべきのみ、

(二) 憤怒の情に打勝て、自己の快活を妨疑すると同時に、他人に快活心を起さしむべき一大頓挫をなすものは、實に憤怒の情なり、固より人は感情の動物なれば、面白からぬことに遇へば、多少心を惱まし、其極憤怒激昂に至るべきは、人間として免れ難き弱點なりといへども、是れぞ尤も吾人が警戒を加へて抑制を要すべき重大の場合にあらずや、然かも事實に於ては、憤怒すべき事實に遇はざるに先ち早くも怒氣を衝き、口角沫を飛ばして論戰するに至るあり、悲むべきの極のみ、

縦しや一時の憤怒を洩らして自己の專横心を満足せしめ得たりとするも、別に何の得る所あるにあらず、却て人物の眞價を下落せしむるものなれば、多少の苦痛こそあれ、忍んで之を發せざるに如

かず、然かも大抵の場合に於ては此の如くして怒氣は何時しか消え失するものなり、

滑稽に托して自己の怒氣を消散せしむる人の如きは、確かに智慮深く、用意周匝のものといふべし、斯くするに於ては、我も人も共に

笑ひ、果ては互に無邪氣にて快く別るゝに至るべきなり、

(三) 同情心を表示せよ、同情心にして眞個自己の心底より流露するに於ては、其精神の眞摯たるを告白するの手段たるのみならず、快活心も確かに之に因て十分に發揮せらるゝものなり、他人が困難、苦痛ありたる場合に於て、『ア、然うです？』『ウ、フーン！』など、鼻先にて挨拶するが如きは、同情心の缺乏なるのみならず、又實に他人を愚弄するの極といふべし、加之斯かる行爲のために他人に快感を起さしむべき機會を失ひ、憎惡の情を萌さしむるに至るは到底免

るべくもあらず、

同情心の缺乏せるは、實は專横、悍惡、無情にして人間としての本心を備ふるものといふべからず、然るに世人にありては、自己が現在同情心を表示し得らるべき場合に於てすら、冷然として之を度外に附し、敢て深き注意を拂ふことあるなし、是を以て萬事を擧げて輕卒、冷淡に歸せしめ、自己の言語を不快ならしめ、自己の行爲をして賤劣に陥らしむ、斯かる人は自己の逆境に陥る時に於て如何てか熱心、誠意を以て迎へられ、且つ其所説に對して信服を受くるの望あるべきや、

(四) 虚飾の態度を避けよ、人心を快活に導くべき尤も有力の原動力は、自己の肺肝より流露せる眞摯、誠實にして自然的の言動にあり、溪澗を奔下する涓々たる清流に臨めば、何人も其心身を爽快、清新ならしむるは、何等の人工的、虚構的、風致なくして、觸目の光景悉く是れ、自然に接すればなり、人心に於ても亦正に斯の如し、

凡そ何人を問はず、虚飾を事とするの風習あらんには、其言語といひ、動作といひ、一に是れ、自然に反し、事實を枉げ、眞摯を害し、折角流暢なる言語と圓滿の動作をして見るなきに終らしむるもの、眞に怪むに足らず、少しく眼識の高きものにありては、此輩の言動の虚飾、虚構に出づることを看破し、其陋劣の態度を冷評して、外面には「如何にも御尤も千萬なり」と首肯するにも、關はず、内心に於ては私かに之を冷評して、其言ふ所に信を措かざるのみか、却て之を賤むの傾向を生ずるに至るは、眞に是れ止むを得ざるの勢なり、之に反し、眞摯より出てたる言語は、何事にあれ十分他人を信服せしめ、其談話には一味の清涼、爽新を生ずるに至る也、

(五) 心を持するこそ潤達なれ、自己の心こそ萬事を決すべき最大の根底といふべし、快活心の表示に見るも亦然り、苟くも人にして此點に注意し、其心を持すること潤達にして、天空海濶の如きことあらんには、自己の他人に對する言語作法は、自から快活となり、毫末だも不快の分子を止めざるに至るべけん、此の如きは確かに人として心得置くべき事項たるのみならず、又實に巧妙なる處世の道と知らずや、

凡そ心のネチ、く、くして何となく、奥齒に物の挟まりたるが如き人に接する程、不快の感を生ずるものはあらざるべし、何事を話しても要領を得ざるは、勿論其作法までも如何にも間の抜けたる調子にて、他人を惱ます事の多きは、茲に絮説を試るまでもなし、而して此の如き心的態度を抱くに至る大原因は、畢竟するに潤達の性質

を有せざるに出づるのみ、何人といへども、此種の人物と語を交へて、快感を生ずるものに、あらず、又決して衷心樂しく思ふものにあらず、十中の八九迄は、二度と此輩と會するを避け、若しくは之と談話を交ゆることを思まはしく思ふに至るべし、

(六) 他人に十分の満足を與へよ、自己の心に満足を與へて、胸に不平、憂患の念を絶たしむるに至るは、勿論のことなるが、更に一步を進め、ては他人に對して、迄も満足の心を起さしむべき方法を工夫せざるべからず、此のことたる尤も重大の道と心得置くべし、

快活心は満足に伴ふて起るべきものにして、不満足、不平などを起さしめては、到底快活の感を抱かしむるに由なし、世には一種の愚昧漢ありて、自己のみ得々然として、他人に如何程の迷惑を懸くも、毫も顧ることなく、只々自己の心を満たせば、夫にて已に十分の

快活心を與へ得らるゝものゝ如く誤解するの結果、一般世人より忌はしく思はるゝは勿論、果ては相手にせられざるに關はらず、猶且つ之に心附かざるものあり、「徳は孤ならず必ず隣あり」とは先哲の道破せる名言なるも、此輩は毫も此の一事に反省するの心なく、萬事をして混沌昏迷の中に終らしめ、快活心の涵養に一大打撃を加ふるものあり、思はざるの甚きものにあらずや、宜なり、彼等が到る所に於て、反目嫉視せられて、一刻といへども、歡待を受くること能はざるや、此の如きは愉快なる人生を化して、強て自ら憂鬱、寂漠なる乾燥無味の乾坤となすものに外ならず、暗愚とも狂妄とも殆んど名の附けやうなきものゝみ。

快活心表示の機會

要するに應對談話の上より見るときは、快活心は尤も重大の地位を占むるものなれば、之に對して尤も注意を拂ふことを忘るべからず、苟くも他人に對して快活を與ふる機會あれば、必ず之を逸することなくして、機慧に然かも敏捷に之を表示すべき方法を取らざるべからず、而して他人に快活心を與へんと欲せば、先づ其の根本に溯りて、「如何にせば満足せしむべきや」と攻究するを要す、又自己に於ても常に快活心を訓練すべき方法を實踐して怠る所あるべからず、一旦此の如き方法を實踐して誤ることなからんには、其談話と作法に一大潤飾を加ふるは言ふ迄もなく、「彼の男は如何にも心地よき人物なり」と思はれ、若しくは「如何にも心の快活にして精神を爽快ならしむる人物なり」と評せられて、交際社會は言ふに論なく、一般世人よりも一大歡迎を受くるに至るや、必ず期待すべきのみ。

第九章 風采と態度

根據なき妄評

應對と談話の洗練にして完璧の域に入らんと望まんと欲せば之と同時に風采と態度に就ても十分の注意を用ひ決して輕卒に附すべからず予が此の如き言をなすを見て、一部の青年は予の眞意を誤解して、邊幅の修養を教ゆるが如きは、未技たるものみと批評するものあるやも知れざれど、此の如き根據なき妄評は予輩に取りて毫も痛痒を感ずるものにあらずのみならず却て批評家自身の無智淺慮を發表するに過ぎず、

談話と作法の本質より言へば、如何に風采は賤く見ゆるとも、又其態度は武骨にして優婉の域に入らざるにせよ、苟くも明快の言語を吐き、周

匝の態度に出づれば夫れにて十分なるべしと思はるれども、是れ未だ一を知て二を知らざるものなり、書家の筆を走らして雲烟を生じ、畫伯の丹青を凝らして大作をなすや、必ず先づ其用筆、其用紙等の如き瑣細の點にまでも深き注意を用ひて輕卒に附せざるのみならず、其用墨の如何を顧省するにあらずや、

名優の舞臺道具

更に見よ良優の妙技を演ぜんとするや、其手腕の鍛鍊に力を注ぐは勿論のことなれども、更に一步を進めて、其衣裳、其粉飾、其道具立までに、微細の注意を拂ひ取て之を忽緒に附することなし、固より技倆の拙劣なる俳優に至りては、如何に完全なる舞臺上の準備ありとも、十分其手腕を揮ふに由なかるべきも、獨り秀絶の名優に至りては、舞臺上の準備の

完備と共に愈々以て其妙技をして神に入らしめ、観客をして端倪するに違あらざらしむ。

應對談話に於ても亦其趣を一にす、言語の明快に作法の優婉なるのみにて未だ以て足れりとすべからず、其風采に於ても態度に於ても之と匹敵すべき準備を怠るべからず、是れ其談話をして一層の光彩を放たしめ、其應對を以て一層の妙味を添へしむるに至るべければなり、談話の法に精通せんとするの容易ならざるは、之に因て其一般を窺ふに足らん。

清潔の衣服を着けよ

如何なる風采をなすべきと問はるれば、問題の範圍廣漠にして、之に對して積極的説明を與ふること困難なりといへども、清潔にして毫も不

潔の色を帯びざる衣服を着するは尤も重要なことといふべし、是れ必ずしも奢侈と虚榮の道を説くにあらずして、人に接するの作法なれば也、一定の儀式を要する時に際して、之に反する服装をなすは、人に對して禮を缺くと同じく、不潔にして垢の着きたる衣服にて多人數の前に現はるゝは、無作法の極といふべきものなり、聞く米國などにては、實利實用を主とせるにも關はらず、此點に於ては毫も苟且に附せず、雇員を採用する場合に於てすらも、不潔の服装をなすものは、斷乎として之を排斥して毫も顧る所なしと、一方より見れば多少極端に失するの恐なきを保せずといへども、社會に處する禮儀の上よりすれば是非斯くあるべき筈のものなり。

加之其作法の上より見るも、カラの垢着き、ネクタイの汚れたる、カフス汚點を示せる、若くはズボンのボタンの外づれたるなどは、局外者より

見るも如何にも間の抜けたるものにして、體裁の悪きことは三尺の小童といへども之を弁知し、其ボンチ繪の材料として適當のものたるを認るべし、固より談話の眞意は、服装のために左右せらるゝにもあらざるべきも、間の抜けたる態度の服装をなす人の談話は、其言語までも何となく調子を外れたるもの、如く思はしむるものにして、此所已に一大不利益あるを見るにあらざるなきか、已に他人をして間の抜けたるを思はしむる以上は、如何てか自己の所説に信服せしむるを得べき。

他人の眼に着き易き者

適當の風采と適當の態度は何事に就ても必要なることなれど、殊に談話に於ては其切要を感ずる所大なり、蓋し他人の尤も眼に着き易く、且つ心に映じ易きものは、風采と態度の二者に存することは、何人も首肯

せざるを得ざるべし、此の重大なる事項を蔑視して『予は談話に於て巧妙を期するを主眼とするが故に、服装の如きは敢て問ふ所にあらず』などと思ふが如きは、決して洗練巧妙の談話術に通ずる所以にあらざるや論ずる迄もなし。

然れども衣服は必ずしも華美にして高價を拂ふの必要あるを見ず、清潔にして他人に快心を與へ得るものなれば、夫れにて十分に於て若し此の上を望まば、華美ともなり、奢侈ともなり、思はし、華美と奢侈とは清潔と何等の關係なきものにして、却て人目を惹くこと多からしめ、場合に因りては不快の感を生ぜしむることなきにあらず、凡そ服装の如きは、自己の年齢、職業、地位、收入等に相應して巧みに之を調和せざるべからず、自己の分限を忘れて奢侈的服装をなすの愚なると共に、自己の年齢をも度外に附して餘りに華美なる服装をなすは、如何にも藝人染み

て苦々し此の如きは斷じて排斥せざるべからず

適度を忘れる愚味漢

靴の先きに泥土の着きたるまゝにてブラシも懸けず靴墨も附けざるまゝにて他人の家を訪問するものあり一方より見れば如何にも洒落にして細事に拘束せざる大度ありと見えんも其實一方より見れば無禮無作法にして社交上の禮節を無視するの甚きものなり心ある人は斯かる人を相手とするを好まざるべし眞個の人格は決して服裝の如何に因て決定せらるべきにあらずれど若し相當の人格ある人が適當の風采を備へば其品格を高むること一層大なるを見るべし此の如きは極めて區々たる細事の如く見ゆれども其他人に及ぼす印象に至りては決して細事として看却し難し

又適度の態度に就ても十分注意を要すべきものあり人に因ては他人が談話をなしつゝあるに際して他を顧みて毫も其言ふ所に注意せず自身に於ても極めて調子外れの言動に出て眞面目なるべき場合に哄笑しつゝ得々然たるものあるかと思へば無邪氣の談話に際してすら却つて一言だも吐かず列坐の人をして興を醒まさしむるに至ること尠からぬを見受くることあり此の如きは確かに『適度』てふ一事を忘却したるの結果のみ適度といふことに心附きたらんには斯かる失態は難なく避け得らるべきのみ

先方の顔を見て語れ

談話に際して他人の言を聞く時は常に先方の顔を見るを要す是れ一般の禮式なり從來の日本の習慣よりすれば他人の顔を見詰めるは非

禮に當るものなりと稱したれども、若し談話中に他人の顔を見詰めて、
 して他方のみを顧るものとすれば、こは是れ他人の言ふ所に對して不
 満足なるの結果、碌々相手にして傾聴せざるものと解釋せらるゝも、果
 して何の辭を以て之を辯護すべきや、心得違ひの大なるものといはざ
 るべからず、
 要するに談話をして巧妙ならしめ、應對をして敏活ならしめ、以て文明
 的國民の一員として恥しからぬものたらんと欲する以上は、文明的國
 民らしく語ると同時に、又其態度に於ても陳套舊式なるべからず、是れ
 實に青年の世に處するもの、着眼すべき第一要義にあらずや、

談話の道具立

風采と態度は談話を潤飾すべき道具立なり、談話をして一層の妙味を

添へしめ、他人に快感を起さしむべき重大の要素なり、談話は談話にし
 て風采態度は風采態度なれば、殊更此の二者を連結して修養するの要
 なしとは、實際社會に盲目なる机上の空論のみ、斯かる妄想に支配せら
 るゝの人は、其言語、應對の法に於て、洗鍊、巧妙に出づること能はざるは
 勿論のこと、之がために圓滿なる社交を阻害し、敢て一身上種々なる失
 態を見るに至るも亦真に止むを得ざるの結果といふべし、邊幅の修飾
 に全力を傾けて他を顧みざるは、勿論不可なれども、全然之を没却して
 念頭に置かざるが如きは、確かに文明的人物として見るに足らず、

第十章 頓才發揮の必要

談話席上のダイヤモンド

快活の談話と巧妙の應對に因て幾多の機會を捉へ、一身の利益を圖らんとするものに頓才發揮の必要なるは言ふまでもなく、快活なるべき談話の席上にも亦た頓才の缺くべからざるは今更改めて之を反覆する迄もなき所なり、然れども言ひ易くして行ひ難きものは此の頓才の發揮にあるかな、談話の趣味を増進せしむべき頓才も、之が天才なきものは、之を適切に處理することの容易ならざるものあり、之に反し、天性伶俐機敏の人にしては、左程の修養を積まずとも、又何等先輩の指導を待たずとも、十分に此の呼吸を呑み込みて時機を逸することなく、善く頓智と頓才を振

り廻して、自己の才腕を發揮するは勿論のこと、他人にまでも快感を起さしめ、談話に花を咲かしむること、吾人の日常實見する所なり、此の如く天性頓才に富みたる人に於ては、苦心なく、深き思慮をも廻さずして、適當の場合に處すべき適當の道を開くこと殆んど掌を反すよりも易きものありといへども、左ればとて天才ある人にあらざれば、此の才能を發揮する能はずといふに至らば、應對談話の活法は一部少数人士の掌握する所となりて、多數人は、此の快味を樂むこと能はざるに至るべし、然れども吾人の所見を以てすれば、常人に於ても十分頓才を發揮し得るものたるを信じて疑はず、之に要する資格としては、單に常識を備へたるの人たれば足る、

天外の奇想を要せず

且つや頓才其者に就て見るも決して奇想の天外より落つるが如きものたるを要せず常識に協ひ常識に従て處決すれば可なるものにして、毫も其他を問ふの必要あるなし、已に頓才にして常識の範圍を脱せざる以上は常識ある人ならんには何人にも如何なる場合にても十分之が才能を發揮し機宜を誤るが如きことはなき筈なり、此の一事にして已に解決せられたる以上は「予は天才の人にあらざれば頓才の發揮を期待すること能はず」など、自ら失望するにも及ばざるべし、要するに自己の才幹に應じて必要な場合に際し適當の處理をなすは是れぞ頓才の大眼目たるべければ「常識ある常人」こそ却て頓才の發揮をなし得べき次第ならずや、

然れども頓才なき人は強て頓才を發揮せんと欲して無用の言を吐き、若くは迂濶の行爲に出づるは頓才なきより猶更ら可笑しく且つ少しく滑稽なり、吾人は列座の間に立ちて此の如き行爲ある人を見ては、殆んど失笑を禁ずる能はざるを知る也、
頓才は具體的に説明して一々之を指摘する能はず、何となれば機に臨み變に應じて巧みに其場合に處するこそ頓才の道なるべきも「斯かる場合には斯く爲せ」と一々之を指示するに於ては人間の應用力を沮害し圓滿なる人心の用法に大打撃を興ふるものなれば也、
自己にして頓才の缺如せるを認め是非とも人間並みに之を涵養せんと欲せば拙劣なる頓才——寧ろ無作法——を振り廻さんよりも、多人数の間に出入して先輩若くは經驗家の爲す所に學ぶは勞少くして効果多き所以なり、

着眼の點如何に存す

人の爲めに扇子を取りて薦む、是れ眞に一舉手の勞のみ、傍觀者のために椅子を薦む、是れ亦一投足の勞のみ、隣席の客のためにマツチを取る、是れ亦區々たる勞のみ、若し夫れ一步を進めて言へば、他人の爲めに僅かに一言の讚辭を弄し、若くは他人の健康を祝す、是れ自己の爲めに何程の勞力と苦心を要すべきか、此の些少の勞力と些少の言語の間にも、之を適當の場合に處理すれば、確かに自己の頓才を發揮して、他人の快感と満足を買ふの基たるに至るべし、之を度外視して不問に附すれば、自己の無作法無能を意味するに至る。

爲す所は極めて微々たるのみ、然かも他人を感動せしむるの効果が斯く迄も大なるものあるを見ては、誰か頓才の勢力の意外に大なるに驚

嘆せざるものかある、婦人小兒といへども猶且つ之を認めざるものにあらざるべし、況んや身心の健全なる有爲の青年にして、將來の大成を期するものに於てをや、

要するに頓才たるものは、儀式張りたる面倒臭きものにあらずして、圓轉滑脱にして如何様にも之を處理し得べきもののみ、然るに世路の經驗足らざるものに於ては、此の點に着眼することなく、漫然として一方に偏するの僻あり、思はざるも亦甚しといふべし、

故の田口博士の如きは、確かに常識あり頓才ありたる人物といふべし、彼嘗て『樂天錄』を著し、其中に某將軍を評して曰く、『某將軍、歌も出來、書も出來、軍にも勝ち、首相となりても議會を解散せず、誠に幸福の人なり、然れども凡て楷書の筆法を以て來る、故に高尚なる所なきに非ずと雖も、雅味には乏さが如し』と、穿ち得て妙を極む、今日の青年にして頓才に

乏きものは、兎角楷書の筆法を以て來るもの故、談話と應對の道に於て圓滑、巧妙を失するに至るなり、三省なかるべからず。

第十一章 沈黙の眞價を解せよ

沈黙も一種の談話術也

談話の術に精通し、應對其宜きに協ひ、品位ある人物として交際場裏に喝采を博せんと欲せば、單に口舌の訓練のみに訴へずして、一步を進めて沈黙の眞價を解し、且つ善く之が適應を期せざるべからず、是れ一見容易なるが如くして、其實最も訓練を要するものなり。

談話の妙は、必ずしも談論滔々無用の贅辯に花を咲かするを言ふにあ

らずして、必要な場合には寧ろ沈黙を守り、無益の言を弄して他人の嘲笑と誤解を招かざるや、慎むにあり、人或は沈黙者を以て無能漢、怯懦漢と看做すものなきにあらずといへども、現在必要もなきに強て口舌を弄して、空談に耽るが如きは、寧ろ無思慮の甚きものにして、其弊害の大なる遙に沈黙者の上に出づ、然るに彼れ無思慮の人は、此の區別を知らずして自己の舌に任せて空談するを以て、『交際場裡の花役者』たるが如く誤解せるものあり、思はざるの甚しきものといふべし。

必要な言は無益のみ

然れども請ふ吾人の眞意を誤解することなかれ、必要な言語は、寧ろ語らざるに如かず、語りて害あるが如き言語は、確に必要な言語なり、言語は意思の表示にあらずや、無益の言を發することあらば、自己の

心になきことまでも恰かも斯かる心事を抱くが如く誤解せらるゝに至るべし。

諺にも『口は禍の門』といへり、拙劣、不必要の言を發するに於ては遂には自ら禍殃を招くに至るべし、左れば漫りに沈黙を守るの必要はなきも、明かに無益と知りたることは寧ろ言はざるこそ賢き手段にあらずや、談話すべき有用の才幹を抱ける人が必要な場合に沈黙を守りて他人の所説を傾聴することの如何に輿床しく且つ伶俐に見ゆることよ、然るに無能の人は此の點に就ては殆んど輕卒に附し、胸に浮びたることあれば、毫も選擇を加ふることなく、場所柄をも辨へずして無用迂濶の言を弄して後日の痛悔を遺すに至る。

拙劣の談話家

兎角必要なに饒舌喃喃たるの人は其言語無駄のみ多くして其精粹を摘取すれば僅かに二三語に過ぎず、極めて馬鹿々々敷こといふべし、斯の如くして、他人を樂まし、他人に満足を與ふることを得ば、稍々怨し難きにあらざるも、多くは人を疲倦懊惱せしむるのみにて、自他に何等の利益あるなく、單に貴重の時間を空費するに過ぎず、必要の言語は何を差措ても語らざるべからず、場合に因ては滔々數千萬言に亘るも決して辭すべきにあらず、然かも是れ沈黙家としての徳行を傷くるものにあらず、又眞個の意義にての沈黙と衝突せざるものなり、然るに實際に徴するに、所謂饒舌喃喃々として無益の言のみを吐くものは、愈々必要な場合に臨みては、數千萬言は愚か、一言半句だに述べ立つべき勇氣なし、故に平常の多辯に似ず、斯かる時は、殆んど當惑して爲す所を知らず、口を開て談話をなすべきは、此時なるに、彼や殆んど自

己の胸襟を吐露するの元氣なし憫むべし

沈黙の眞價の存する所

沈黙家とは談話を爲すの元氣なき人をいふにあらずして必要な言が故に一言一句の微といへども苟且に附せざるをいふもののみ多辯饒舌の徒は、這般の消息を辨別するの力なきを以て無益の言と知りつゝ之を語り、後日胸中に煩悶を起すに過ぎず、畢竟するに沈黙それ自身が必ずしも有益なりといふにあらずして前後を慮かり場所柄を辨別し適當の場合に適當の行爲をなすが故に有益のこゝといふのみ人は常に場合と機會の如何を見て黙否の如何を決せざるべからず一言の爲めに全體の計畫を水泡に歸せしめ一句の濫用のために積年の友誼を破るに至ることは決して珍らしからず又

一言の辯明を缺きたるために他人をして自己の疑團を深からしむるものあり如何なる場合に語るべきや又如何なる場合に沈黙すべきやは自ら顧みて判斷すべきのみ予は沈黙のみが利益なりといふにあらず又無言の人が必ず賢しといふにあらずして必要な冗長迂濶の饒舌が自他に迷惑を及ぼすことの尠なからぬを數ふるに過ぎず

眼の語る談話

且つ又一方より見るときは沈黙必ずしも沈黙にあらずして談話以上の談話たる場合尠きにあらず迂濶空想の人が他方を顧みつゝ漫然沈黙を守るの類は沈黙と同時に間の抜けたる態度を表すといへども態度といひ風采といひ機慧に出で敏活に達し靜肅の態度を以て他人の言語を傾聽するの人は語らざるに於ても確かに語りたるものあるな

り、英國の俚諺を聞かずや、口の語らざる言語は眼の語る言語にて判断せよ」と、機慧の人に於ては、眼光一閃の間に於て已に流暢明快の言語の發せられたるものあるを見るべし、只此の言語を聽き得る人は、是れ亦機敏、俊秀の人物にして、談話術の精髓に通曉せるものたらざるべからず、

談話の眞價を認むるの人は、之と同時に沈黙の眞價をも了解して之を尊重するの決心なかるべからず、「言語は銀の如く、沈黙は金の如し、然るに饒舌は銀を化して鐵となすものなり」とは、饒舌無用の言を發するものを戒めたる英國の格言なるが如何にも其通りにして、何人も之に異議を加ふるものあらざるべし、用意周匝なる談話家たらんと欲する者は必ず之に着目することを忘るべからず、

巧妙の談話家は沈黙家なり

眞正の談話家は同時に眞正の沈黙家たるものなり、彼や言語の勢力の重大なるを悟ると共に、沈黙の徳行を輕視すべきにあらざるを認るに躊躇せず、左れば此の如き人物にありては、必要の場合には、赤誠を披瀝して光輝萬丈當るべからざるの概あるも、又其傾聽の態度を守るべきの時に臨みては、沈黙して他人の談話に妨礙を加ふる所あるなし、左れば眞正の談話と眞正の沈黙とは、決して衝突せざるのみか、却つて相一致して毫も離るゝことなきを知るべし、故に發して談話となり、潜んで沈黙に至る、此點に於ては、彼れ喃喃たる饒舌多辯家の窺知すべからざる巧妙、周匝の品藻あるを見るべし、

談話を一種の技術として研究し大に自己の才幹を助長せんと欲する

ものは必ず沈黙の眞價を解して、拙縦自在適宜に之を參酌すべき用意あるを要す、漫然として沈黙を守り空想に耽るが如きは、愚者狂人といへども猶且つ之を善くすべきも眞正の意味に於ての沈黙を守り之を適當に應用するには、是れに一種の訓練を要するものなり、此の差別を悟らずして漫然として沈黙を守り、必要の場合に於てすら必要の言語を吐くの勇氣なくんば、沈黙の域を脱して已に怯懦卑劣無思慮となるものなり、斯の如く人は其弊害の及ぶ所決して喃々たる饒舌漢と擇ぶ所なし。

談話をして一大光彩を添へしめ、應待をして機慧ならしむるものは、必ずしも多辯喃々たるにあらずして、一に適當の場合に適當の所置を取るに存す、苟くも無意義の沈黙ならざる限りは、決して談話の進行と快活に頓挫を與ふるものにあらずして、寧ろ之を進捗せしむべき無形の

一大勢力なりと悟るを要す、要は適應を誤らざるに存す。

第十二章 愛嬌表示の秘訣

心地よき言語とは何ぞや

如何程巧妙の談話家も其言語に圭角ありては、圓滿を缺き快味を薄からしめ、座客をして襟を正して其言ふ所を聴かしめ得べきも他人に對して歡喜怡樂を感ぜしむることは、斷じて能はず、香なき薔薇花は人をして清趣雅致を感ぜしめざるが如く、愛嬌なき談話は何となく肩の凝るが如き心地して他人に快活歡喜の念を起さしむること難し、談話術の言ひ易くして行ひ難き所以のもの一に此等の呼吸に通ぜざるにあ

同一の言語同一の舉動も之に愛嬌の伴ふあれば以て粗遠を温め言語に一大光彩を添へて清趣湧くが如く人をして其人格の崇高濶大なるを思はしめ細事に踟躕せざる雅重に推服せしむるに至るものなり

愛嬌を阿諛を混同する勿れ

然るに世の經驗なきものは愛嬌を以て一種の阿諛と誤解し最も恥づべき行為なりと思へり是を以て其言語に潤澤なく其作法に典雅の趣を欠く野人禮を知らずとは確かに此種の人物をいふにやあらん然れども茲に所謂愛嬌とは決して此の如き賤むべきものにあらずして人間の圓滿優美なる心情の發露といふて可なるべし如何に正確と嚴正を重ずる時代とは言ひながら濟まし切りたる顔色をなして微笑だに

浮べず他人の歡言に對して碌々挨拶もせず八筈ヶ敷態度を以て他人を睥睨するが如き人に對しては何人か善く快感を抱き同情の念を起すものあらんや否々十中の八九迄は慥に嫌惡の情を起すに至るべし愛嬌は恰かも言語態度に於ける調味物ともいふべし之あるが爲めに其言語を和らげ其態度を潤飾す然るに世故の經驗に乏しき人は之を婦女子の行に類すとして賤み傲岸不遜を以て男子の本領なりと心得の結果萬事を擧げて悉く圭角破綻反目嫉視の目的物と化せしむ悲むべきの極にあらずや

自己眞情の流露のみ

愛嬌と阿媚には一大差別あるを知らざるべからず阿媚とは心にもなき御世辭を振り蒔き強て他人の同情を求めんとする卑劣極まる作法

に外ならず、然れども眞個の愛嬌とは決して此種のものにあらずして、寧ろ自己の心奥に感激したる他人の行爲に對して、自己の眞摯なる尊敬を表するの言語行爲を指すものにして、如何なる點より見るも忌はしき所もなければ、又賤むべき點あるを認めず、自己の心に於て信實と感じ、自己の衷心より正當なりと信じたる所をば、之を言語に表白すればとて、毫も差支なきことにあらずや、青年にして苟くも多人數の間に立ちて事をなし、他人の同情同感を得、自己の才幹を揮ふに志あり、先輩と交を結ばんと欲する以上は、よろしく平生經驗家のなす所に徴して之が實行に敏ならんを要す。

愛嬌の途は自得にあり

英國の名士チエスターフキルド卿は其愛兒を戒めたる書簡中に於て、

愛嬌表示に説き及して曰く「愛嬌の術たる人間に取りて洵に必要なると同時に、之に通曉することは頗る困難のものなり、然れども愛嬌は規則詰めに述べ難し、たゞ注意して御身自身の善良なる思想と觀察にて判斷し、以て自得するの心懸あらば予が御身に申送るよりも優るものあるべし。云々」と、愛嬌は恰かも頓才の表示と同じく、書籍言語もて一々述べ難きものにして、一に之れを各人の自得に委せざるべからず、然れども人苟も愛嬌を表白するに巧みならんと欲せば亦た自ら途なきを愛へず、他人が自己に對する愛嬌を篤く注意し、自己が他人に對するの道も總て此の如きものと判斷するが如き其の一方方法なるべし、自己が他人より愛嬌を受けたるが如く、自己も亦他人に對して斯くなすに於ては、知らず／＼圓熟なる愛嬌の道に達し得るに至ること決して難きにあらざるべし。

他人の缺點を發くべからず

愛嬌を表示する上に於て虚托は最大の禁物と心得べし、一旦虚托を装ふことあらば快活眞摯機慧の要素を缺きて一種言ふべからざる滑稽的行爲と化するに至るべし、是れ程忌はしく感ずるものはなく、又是れ程他人に不快を感ぜしむるものはなかるべし、

愛嬌表示に就て何人も必ず心得置くべきことは如何なることあるとも、他人の面前にて其缺點などを憶面もなく指摘するを謹むにあり、然らずんば必ずや他人の悪感を買ひ、不満足を得るに過ぎざるべし、他人の缺點を數へ立てい得意の色あるが如きは斷じて容赦し難きこといふべし、斯の如き場合に於て經驗に富みたる人は、此の輩の缺點指摘を受けたりとするも、柳に風と受け流し、不快の色を示すことなかるべし、

しといへども、其心中にては必ずや不満足の色を禁ずること能はず、加之斯かる行爲は往々口論を惹起すの種子となして、愛嬌と全然反對なる苦々しき結果に至るべし、

又他人特に先輩の長所あるを見れば、之を稱揚し之に對して尊敬の意を表するに躊躇することなかれ、自己が之と同様の場合に同一の取扱を受けたらんには必ず快感に堪へざるが如く、他人の心事に於ても總て同一のものといふべし、古人は「己を推して人に及すを仁なり」といひ、

又「己の欲せざる所之を人に施すなかれ」と戒めたるが、總て此の如き方寸より割出して他人を付度し、自己の尊敬的意思を表すべき機會あらば逸することなく巧みに之を捕ふることを力むべし、斯くするに於ては常に自ら愉快を感ずるのみならず、眞個に「愛嬌に富みたる圓滿の人」として、交際場裏に於ては勿論、一般世人よりも至大の尊敬と歡迎を受

くるに至るべきや蓋し疑を容れず

第十三章 初對面の人に接する道

万事初對面にて決せらる

予は反覆陳辯を厭はず讀者のために應對談話の要訣を叙したれば、讀者は之に因て文明的應待談話の要點を悟り得たるなるべし、初對面の人に接するも、又如上の所説を適應して十分遺憾なきを得べき筈なるべきも、特に此所に注意すべき事項は、戀親の人若くは平生見慣れたる人に對しては、自己の言語應對上の失態ありとするも、多少之を看過し之を容忍せらるゝ餘地あるべしといへども、初對面の人に於ては、之と

趣を異にし、一旦此會見に於て先方の感情を害したる以上は、容易に之を恢復し得ざる場合尠ならず、折角にも圓滿の交渉を遂ぐべき重大の事件も、初對面に於て先方の感情を害したる結果、或は破談に終り、或は再度の會見を水泡に歸せしむるが如きは、世上屢々見受くる事實にして、特に地位、名望、勢力ある先輩に對しては、一言も苟くもせず、一舉一動悉く注意を加へ、斷じて失態を致さぬやうにと力めざるべからず、

試験中の身たるを悟れ

予にして斯く言はゞ、血氣にはやる青年輩は「これ人を腐腸無氣力ならしむるの言なり」など、批評して、碌々耳を傾けざるものあるやも知れざれども、社交上の禮儀にして、後進者が先輩に對しては、殊更ら其然る

を見るなり、

言ふ迄もなく、如何程鄭重なる紹介状を携ふるにせよ、初對面の時に於ては、未だ双方の心事互に分明せず、其の相手方の如何なる人物なりやに疑團を抱きつゝ、之れを試験せんと待ち受くるものなり、然かも此の試験たるや、初對面の時に於て多くは決定せらるゝものなれば、此場合に於ける一舉一動は充分注意して、苟も忽諾に附するなからんを要す、若し然らずして、初對面の場合に際し、無用の言を吐き、不快の感を起さしむべき行爲を演じ、若くは間の抜けたる顔色をなすが如きは、自己が如何にも『無作法の人』、『迂濶の人』なりとのことを暗々裏に表示するものにして、面目を失ふること之れに過ぐるものはあらざるべし、何事にても注意を缺かば、總て失態を演ずるの基となるものにて、初對面の時の如きは、特に然るを知るなり、蓋し當初の所感の如く、強き印象を腦裏

に與ふるものなきは何人も了解する所なるべし、

左れば先づ如上の觀念を備へて人に接するにあらんには、恐らくは失態なからんも、平生知人に對するが如き筆法を以てしたらんには、直ちに先方の感情を害して、再度の會見を拒絶せらるゝに至らん、極めて些細の所にも、實は至大の呼吸あるものにて、此の呼吸こそ初對面の運命を決すべき勢力を有するものなり、之れを知らざらんこそ愚昧の極といふべし、

初對面の七大要件

今予をして其大綱を指摘せしめば、左の數項の如きは、初對面に於て常に心得置くべき重大のものにして、十分運用の妙を期せざるべからず、

(一) 明快の言語にて語れ、言語の不明瞭なるほど他人に誤解を招き

易きはなし、明快の言語は、管に之を聞くものをして快感を起さし
ひるのみならず、自己の所見を開陳するに於て尤も重大のものな
り、不得要領の言語もて語るが如く、他人を惱ますものは他に其比
を見ざるなり、

(二) 清潔の服装をなせ 他人と會見するに、清潔の服装をなすべきは
今更言ふまでもなしといへども、世人の中には、清潔の服装と奢侈
贅澤とを混同して之を輕視し、不潔の衣服を着するも、用務の主旨
を達すれば、差支なきが如く考ふるものあり、然れども是れ決して
鄭重なる行爲にあらざるのみならず、禮節の上より見るも決して
其宜きに協ふものにあらず、初對面の人を判斷するは、外形
に現はれたる所を以てするより他に方法なきものなれば、不潔に
して不體裁の風采を爲さば、如何にもダラシなき人物なりと誤解

せらるゝに至らん、

(三) 用事の骨子のみを語れ、無用にして冗長の言をなす人は、他に迷
惑を與ふること極めて大なるものなれば、斯の如きは斷じて避け
ざるべからず、言ふべき所あらば、一通りの挨拶を済ましたる後、直
ちに本問題に切り込みて、其眼目とする所のみを擧げて語るを要
す、此の事は初對面に於て特に最も重大の要件なれば、輕卒に附す
ることなきやう心得置くべし、

(四) 愛嬌を帯びて語れ、如何に重大の問題といへども、顔に怒色を帯
び、言語に圭角を立て、語るが如きことあるべからず、宜しく愛嬌
ある快活の調子を以て應ずることなく、滯る處なく、穩健悠揚の態
度にて語るを要す、

(五) 常識を外るゝなかれ、談話中人に依りては自己の躁急若くは熱

情に因り前後の事情に頓着なく、下らぬとを述べ立て、他人に迷惑を及すこと尠なからぬものあり、斯の如きは常識を外れたる作法にして決して沈着眞面目の態度とは稱し難し、初對面に於て此の如き行爲あらんには、此の男は常識を外れたるの男なりと思はれて、折角の相談にも乗り呉れざるに至らん。

(六) 手足を前後に動かすなかれ、談話中に於て手足を前後に振り動かし、或は他の方面をのみ顧みて如何にも煩はしさに堪へ難きが如き態度を示すものあり、此の事たる無作法の極にして、懇親なる人に對してすら餘り好まじきことにあらざるに、況して懇親ならぬ初對面の人に對しては、甚だ以て容赦し難きものなりとす、如何なる場合に於ても決して此の如き行爲に出づべからず、談話中は十分の傾聽をなして、謹重の態度をなすべきものなるに、斯かる無

作法の行爲ありては、一見直ちに不快の感を抱かしむるや明か也、(七) 用事の濟み次第退出せよ、用務の濟みたる時は直ちに辭し去るべし、實際話すべきことなきにも關はず、便々として長坐をなすが如きは他人に迷惑を蒙らしむること大なるものなり。

以上は固より其眼目たるべきものを指示したるに過ぎざれど、總て此の精神を失はざるに於ては、遂には圓滿快活の域に達するを得て、他人の同情を博し、自己會見の目的を達するに於て遺憾なきに至るべし、人間の言語と作法の如何に因て其影響の及ぶ所斯く迄重大なりとせば、誰れか其の勢力の偉大なるに驚かざらんや、苟くも平生此點に就て注意と修養とを怠らざるに於ては、思ふが儘に自己の目的を貫徹して萬人を凌駕して、光彩陸離たる一大成功に轉ずること斷じて疑ふべからず、奮勵なかるべけんや、

應對談話法終

明治三十九年九月四日印刷
明治三十九年九月廿日發行

應對談話法與附

定價金廿五錢

著者 蘆川忠雄

編輯者 增田義一
東京市京橋區南紺屋町十二番地

印刷者 青木弘
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舍第一工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地



發兌元

東京市京橋區南紺屋町十二番地 (電話新橋八百七十四番)

實業之日本社

大賣捌所

東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、長明堂、至誠堂
大阪盛文館、杉本書店、名古屋、川瀨代助

實業之日本社發行書目

高橋五郎先生新著(新刊)

新處世觀

◎大版全一册
◎定價五拾六錢
◎郵稅六錢

天下の記者

◎大版全一册
◎定價五拾八錢
◎郵稅六錢

谷干城君題字
中島氣峰君新著

大石正己先生序

禁酒禁煙の五年間

◎大版全一册
◎定價五拾五錢
◎郵稅六錢

英國グランゲキル著 日本海嶽生譯

神經健全法

◎中版全一册
◎定價四拾五錢
◎郵稅四錢

山形香峰新著

讀書便覽

◎三版全一册
◎定價四拾六錢
◎郵稅四錢

江口岳東纂譯

實業大家 獨立自營

◎中版全一册
◎定價四拾六錢
◎郵稅六錢

青年處世法

◎大版全一册
◎定價五拾八錢
◎郵稅六錢

萬朝報記者湯朝觀明君新著(新刊)
少年 冒險旅行

◎定價四拾五錢
◎郵稅四錢

當代の傑物

◎上製金文字入
◎定價六拾錢
◎郵稅六錢

文學士久保天隨君新著

實用作文法

◎定價四拾五錢
◎郵稅六錢

實業之日本社譯

最新讀書法

◎定價四拾六錢
◎郵稅四錢

佐藤尚友君所著

學生の前途

◎定價五拾六錢
◎郵稅六錢

蘆川忠雄君著

心機轉換法

◎定價四拾五錢
◎郵稅四錢

農事試驗場淺井茂侃君新著

最新農業經營

◎定價四拾六錢
◎郵稅四錢

實業之日本記者岳淵生著

新時代之青年

◎定價四拾六錢
◎郵稅四錢

明治生命保險會社庶務課長惣崎貞夫君新著

生命保險提要

◎定價五拾六錢
◎郵稅六錢

信州養蠶家宮人良右衛門君著

經濟的育蠶法

◎大版全一册
◎定價五拾六錢
◎郵稅六錢

堀内新泉君新著

母の書簡

◎定價四拾六錢
◎郵稅四錢

娘に與へたる

蘆川忠雄君新著

應對談話法

◎定價四拾五錢
◎郵稅四錢

土屋長君新著

商業智囊

◎定價四拾五錢
◎郵稅四錢

鶴飼天淵君編著

文章大成

◎上製金文字入
◎定價四拾錢
◎郵稅四錢

鶴飼天淵君編著

書信文大成

◎上製金文字入
◎定價八拾錢
◎郵稅八錢

鶴飼天淵君編著

婦人消息文

◎大版全一册
◎定價五拾八錢
◎郵稅六錢

西谷龍顯君新著

婦人の重寶

◎大版全一册
◎定價五拾六錢
◎郵稅六錢

蘆川忠雄君著

頭腦明快法

◎定價四拾五錢
◎郵稅四錢

法學博士 和田垣謙三 兩先生序 蘆川忠雄君著
 高橋 五郎
人生の慰安
 ◎全一冊 大版
 ◎正價 五十八錢
 ◎郵税 八錢

島田三郎先生序 蘆川忠雄君著
常識の修養
 ◎大版全一冊
 ◎正價 五十六錢
 ◎郵税 六錢

男爵 澁澤榮一先生序 蘆川忠雄君著
實務才幹訓練
 ◎大版全一冊
 ◎正價 五十八錢
 ◎郵税 八錢

人生の奮闘
 ◎大版全一冊
 ◎正價 五十八錢
 ◎郵税 八錢

實業之日本社編輯局編纂
 向上海 發展處
世要訣
 ◎全一冊 大版
 ◎正價 四十六錢
 ◎郵税 六錢

米國敎訓家ライチンダ著 堀内新泉譯
不平慰安法
 ◎全一冊 大版
 ◎正價 卅五錢
 ◎郵税 二錢

實業之日本社編纂 (口繪寫真の家風)
日富豪の家風
 ◎全一冊 大版
 ◎正價 五十六錢
 ◎郵税 六錢

中橋徳五郎君序 西村正雄君著
最新事務法
 ◎全一冊 袖珍
 ◎正價 六十四錢
 ◎郵税 四錢

法學博士 菊地武夫先生序 鶴飼天淵著
貧者の福音
 ◎中版全一冊
 ◎正價 卅五錢
 ◎郵税 四錢

土屋長吉君著
商戰必勝
 ◎全一冊 中版
 ◎正價 卅五錢
 ◎郵税 六錢

土屋長吉君著 (裝飾實例卅六頁)
店前裝飾術
 ◎全一冊 中版
 ◎正價 卅四錢
 ◎郵税 四錢

土屋長吉君著
商品と商業經營
 ◎全一冊 中版
 ◎正價 卅五錢
 ◎郵税 六錢

米國實業界の泰斗 カーネギー翁新著
 早稻田大學 講師 伊藤重次郎君譯
實業の鍵
 ◎大版全一冊
 ◎正價 卅五錢
 ◎郵税 六錢

報知新聞記者 西岡英夫君著
立身と繁昌
 ◎全一冊 大版
 ◎正價 卅五錢
 ◎郵税 四錢

東亞の 大寶庫
滿洲案内
 ◎全一冊 大版
 ◎正價 卅五錢
 ◎郵税 六錢

△附録 滿洲渡航案内 滿洲旅行案内 滿洲地圖
 城陽 加藤政之助君新著 (朝鮮事業案内)
韓國經營
 ◎大版全一冊
 ◎正價 卅六錢
 ◎郵税 六錢

◎附録 韓國地圖 口繪寫真版十頁 (風俗風景寫真卅餘個)
滿洲處分
 ◎大版全一冊
 ◎正價 卅五錢
 ◎郵税 六錢

在上海 前讀實新聞記者 長谷川宇太治君著
渡清案内
 ◎全一冊 中版
 ◎正價 卅五錢
 ◎郵税 四錢

實業之日本臨時增刊
新時代の生活
 ◎正價 卅二錢
 ◎郵税 二錢

實業之日本臨時增刊
處世大觀
 ◎正價 卅二錢
 ◎郵税 一錢五厘

米國自助的成功者ジョン、グラハム著
處世教訓
 ◎特別 四拾五錢
 ◎上製 五拾五錢
 ◎郵税 八錢

米國自助的成功者ジョン、グラハム著
英文處世教訓
 ◎正價 卅五錢
 ◎郵税 六錢

米國女學記者ペエン氏著
女子處世訓
 ◎全一冊 大版
 ◎正價 卅五錢
 ◎郵税 六錢

永野耕造君著
商業修身訓
 ◎上中下三冊
 ◎正價 卅五錢
 ◎郵税 八錢

白露 生著 (口繪十傑肖像插入)
◎正價五拾錢
◎郵稅六錢

實業之日本社編纂 (口繪肖像插入)
◎正價五十錢
◎郵稅六錢

當代の人物の解剖
◎正價五十錢
◎郵稅六錢

桑谷 克堂著 (口繪肖像插入)
◎正價五十錢
◎郵稅六錢

成功 富豪の面影
◎正價五十錢
◎郵稅六錢

實業之日本社編纂 (口繪肖像插入)
◎特別減價
◎郵稅共四拾錢

實業家人物評論
◎特別減價
◎郵稅共四拾錢

鈴木光次郎君著
◎正價參拾錢
◎郵稅四錢

現代名家流奇談
◎正價參拾錢
◎郵稅四錢

實業之日本社編纂
◎正價參拾錢
◎郵稅四錢

實業家奇聞錄
◎正價參拾錢
◎郵稅四錢

米國富豪カーネギー翁著小池靖一君譯
◎正價卅五錢
◎特別上製五拾錢
◎郵稅六錢

實業の帝國
◎正價卅五錢
◎特別上製五拾錢
◎郵稅六錢

米國富豪カーネギー翁著伊藤重治郎譯
◎正價四拾錢
◎特別上製五拾錢
◎郵稅八錢

富の福音
◎正價四拾錢
◎特別上製五拾錢
◎郵稅八錢

實業之日本社編纂
◎正價參拾錢
◎郵稅四錢

成功 錦囊
◎正價參拾錢
◎郵稅四錢

野田叱 電君著
◎正價參拾錢
◎郵稅四錢

岳淵 生著
◎正價卅五錢
◎郵稅六錢

品性の光輝
◎正價卅五錢
◎郵稅六錢

正岡藝陽著
◎正價參拾錢
◎郵稅四錢

致富成業策
◎正價參拾錢
◎郵稅四錢

男爵 前島密先生序 兩君共著
◎大版全一冊
◎正價五拾錢
◎郵稅八錢

實業指針
◎大版全一冊
◎正價五拾錢
◎郵稅八錢

中野觀象君著
◎洋裝金文字入
◎正價五拾五錢
◎郵稅八錢

最新 外國商業地理
◎洋裝金文字入
◎正價五拾五錢
◎郵稅八錢

宮田千年君著
◎洋裝金文字入
◎正價六拾錢
◎郵稅拾錢

世界商業史綱
◎洋裝金文字入
◎正價六拾錢
◎郵稅拾錢

商業學士 小林行昌君著
◎洋裝金文字入
◎正價四拾五錢
◎郵稅八錢

英和商用文教科書
◎洋裝金文字入
◎正價四拾五錢
◎郵稅八錢

渡邊久太郎君著
◎全一冊大版
◎正價五拾錢
◎郵稅八錢

最新 商品教科書
◎全一冊大版
◎正價五拾錢
◎郵稅八錢

五十嵐治郎君新著
◎上製金文字入
◎正價八拾錢
◎郵稅拾錢

最新 商業算術
◎上製金文字入
◎正價八拾錢
◎郵稅拾錢

水島神戸高等商業學校長序
竹内正太郎君著

商業簿記獨習書
◎全一冊大版
◎正價七拾錢
◎郵稅八錢

村瀬玄君竹内正太郎君共著
◎全一冊大版
◎正價三拾六錢
◎郵稅六錢

最新 商業簿記
◎全一冊大版
◎正價三拾六錢
◎郵稅六錢

日本石油會社會計課長 竹田常治君新著
◎全一冊大版
◎正價四拾錢
◎郵稅六錢

實用家計簿記
◎全一冊大版
◎正價四拾錢
◎郵稅六錢

市吉 徹夫君著
◎全一冊中版
◎正價廿五錢
◎郵稅四錢

地理と商品
◎全一冊中版
◎正價廿五錢
◎郵稅四錢

土屋長吉君新著
◎全一冊
◎正價廿五錢
◎郵稅四錢

和洋最新式簿記
◎全一冊
◎正價廿五錢
◎郵稅四錢

折衷最新式簿記
◎全一冊
◎正價廿五錢
◎郵稅四錢

樺山純一君著
◎正價二十錢
◎郵稅貳錢

英文簿記例題
◎正價二十錢
◎郵稅貳錢

法學士 島村孝三郎君著

最新經濟學

◎並製九拾錢
◎上製壹圓拾錢
◎郵稅各拾錢

小林 行昌君 共著
土屋 長吉君

中等經濟學

◎正價四拾錢
◎郵稅六錢

天野爲之君校閱 土屋長吉君著

應用經濟學

◎正價四拾錢
◎郵稅六錢

中野 觀象君著

橫式簿記法

◎正價卅五錢
◎郵稅四錢

法學士 守屋源次郎君著

獨逸社會史

◎正價四拾錢
◎郵稅六錢

報知新聞記者 篠田鑛造君著

俗頭小僧學問

◎袖珍二美錢
◎正價四拾錢
◎郵稅六錢

土屋 長吉君著

最新商業要綱

◎並製七拾錢
◎上製八拾五錢
◎郵稅各拾錢

中野 觀象君著

商業書信文範

◎正價四拾錢
◎郵稅八錢

高間 昭君著

最新珠算全書

◎正價卅五錢
◎郵稅六錢

小林 行昌君 共著
下平 精一君

最新英國商業實務

◎上製金文字八
◎正價四拾錢
◎郵稅四錢

土屋 長吉君著

簡易商業學

◎上下二冊大版
◎正價四拾錢
◎郵稅八錢

土屋 長吉君著

商家繁榮策

◎正價五拾錢
◎郵稅六錢

